

授業と学びの大改革

「学びの共同体」で

変わる！

高校の授業



ISBN978-4-18-063823-9
C3037 ¥2260E

定価 本体 2260円+税

〔授業全般〕



授業と学び
の大改革

「学びの共同体」で変わる！ 高校の授業

佐藤学
和井田節子
草川剛人
浜崎美保
編著

明治
図書
0638

授業と学びの大改革

「学びの共同体」で

変わる！

高校の授業



明治図書

佐藤学

和井田節子

草川剛人

浜崎美保

編著

はじめに

高校教育は、今、転換期にある。高校の目的と意義が問われ、授業と学びのスタイルが問われている。しかし、どのような高校教育が生徒たちの希望ある未来を切り開き、日本社会の繁栄と文化の発展を確かなものにするのかは、必ずしも定かではない。むしろ、どの学校も生徒の厳しい現実への対応に追われ、旧態依然とした授業のスタイルに呪縛され、教師の多忙に追われ、過剰な改革論議に疲弊しているのが現実ではないだろうか。

本書は、何よりも今日の高校における教室の現実から出発し、一人残らず生徒の学びを保障し、生徒たちが夢中になって質の高い学びに挑戦する授業改革の風景を描き出し、そこに息づく教師たちの学びの姿と授業改革によって変わる学校の姿を提示している。考えてみると、高校改革の中核は授業と学びの改革であるにもかかわらず、これまで高校の授業実践をテーマとして執筆され出版された書物は皆無に等しいのではないだろうか。この現実こそ、高校教育の最も深刻な危機があると言ってもよいだろう。

本書は、今から10年ほど前から活発化した「学びの共同体」を標榜する学校改革と授業づくりの実践事例をもとに著されている。「学びの共同体」としての学校は、一人残らず生徒を学びの主権者として育て、一人残らず教師たちが専門家共同体（同僚性）を築くための改革のヴィジョンであり、哲学であり、活動システムである。この改革のネットワークが小学校、中学校を基盤に開始されたのは今から15年ほど前だが、12年前から高校においても導入され、それぞれの学校で「奇跡的」とも呼べる成果をあげてきた。かつて退学者が4割を超えた高校が1割以下に激減した高校、かつて大学進学率が3%程度であった高校が60%を超えた高校、かつ

てトップレベルの大学に一人も進学者を出さなかった高校が、卒業者の4分の1がトップレベルの大学に進学するようになった高校など、その「奇跡」の事例は多様である。しかし、私たちは、これらの「奇跡」は改革の結果であって、「学びの共同体」の学校改革が中心的に追求すべき目標とは思っていない。私たちの学校改革と授業改革の中心目的は、生徒と教師が共に学びの主権者として創造的、自律的に学びの共同体を建設することであり、一人ひとりの尊厳が尊重される民主主義の社会を準備することであり、それらの学びを通して、未来を生きる高校生として、その未来を準備する教師として、希望を生み出す学校生活の幸福を獲得することである。本書のそれぞれの実践事例は、その具体的な風景を描写している。

本書が提示している授業改革は、協同的学びの導入と活用を基軸として展開している。現在、協同的な学びを授業に取り入れたいと考えている高校教師が増えている。言語活動を主軸においた新学習指導要領が実施されるからということがあるだろう。「思考力・判断力・表現力を育む言語活動」は、知識伝達型一斉授業では達成できないからである。しかしそれ以上に、協同的な学びの良さが全国に広く知られるようになったことが理由として大きいと感じている。協同的な学びが日常的に行われるようになると、生徒が主体的に学び始め、教室も落ち着くのである。

高校の場合、学校全体で協同的な学びを取り入れるところは少ない。協同的な学びを取り入れたいと思う教師が個人的に自分の授業の中で行っているケースがほとんどである。しかし、実は高校全体で一斉に協同的な学びを行う方が生徒の変化が早い。授業を変えることで、生徒が変わり、学校そのものも変わっていく。さらに、教師同士が工夫し学び合いながら、協同的な授業を追求していくことそのものが、その高校全体を「学びの共同体」に変えてゆくのである。そこで、本書は、「学校づくり実践」として、協同的な学びを学校として取り入れている高校の導入の経緯、学校の変化、教職員や生徒の反応などを中心に、管理職やキーパーソン

の先生方に執筆してもらった。授業改善を軸とした学校づくりの参考になるのではないかと感じている。とはいえ、コの字型の座席配置や4人グループによる話し合いなどの形だけを取り入れても、最初は良くてもなかなか深まらないことも多い。実は、協同的な学びを行うには、理論も技法も必要になるのである。うまくいかないと感じると、工夫や探究を行う前に協同的な学びへの挑戦そのものをあきらめてしまう傾向があるだけに、これはとても残念なことである。

そこで、本書では、「授業づくり編」として、授業の具体的な姿を実践者に記述してもらった。ここでは、高校の協同にふさわしい課題の設定や、高校らしい授業デザインのヒントになる具体的で多様な実践を紹介している。高校は学校によっても、教科・科目によっても、授業の在り方が変わってくる。だから、教科ごとに、ある一時間を切り取って、授業デザインや生徒の様子、実践の智慧を伝えてもらった。

理念や理論、技法については、第1章「高校改革の課題」と、第3章1「『協同的な学び』を協同的につくる」に、全国の高校で協同的な学びについて助言を行ってきた編著者による説明を加えた。

なお、ここで紹介された授業実践の多くは、授業研究会で公開し、ビデオで記録もした授業である。そのまま再現したのでは読者にわかりにくいいため、イメージしやすいように多少の改変を加えている。協同的な学びの実践例として参考にしていただければ幸いです。なお、生徒の具体的な様子や発言なども載せているが、生徒の名前は仮名になっていることもお断りしておきたい。

これまで、高校を対象にした理論と実践が詰まった本はなかった。本書が、「学びの共同体」をめざして協同的な授業づくりに挑戦する高校の先生方の実践の参考になれば幸甚である。

佐藤 学 (学習院大学)

和井田 節子 (共栄大学)

はつめい

佐藤 学・和井田節子

第1章 高校改革の課題

9

佐藤 学

第2章 学校づくりの実践

23

- ① 生徒の学びが教師を変える〔東京大学教育学部附属中等教育学校・宝仙学園中学・高等学校女子部〕……………草川剛人 24
- ② ボトムアップの学校改革〔滋賀県立彦根西高等学校〕……………夏原常明・樺 敏 39
- ③ ビジョンの共有からダイナミックな学校改革へ〔広島県立安西高等学校〕……………才木裕久 53
- ④ 「学びの共同体」でよみがえる心地よい学校空間〔静岡県立沼津城北高等学校・静岡県立川根高等学校〕……………浅川典善 62

第3章 協同の授業の実際

77

- ① 「協同的な学び」を協同的につくるために……………和井田節子 78
- ② 授業づくり実践 国語〔「学びの共同体」は授業実践をどう変えるか〕……………柴雲智道 89

- ② 授業づくり実践 日本史〔「幕藩体制の成立」〕……………三堂和生 97
- ③ 授業づくり実践 地理〔「アフリカの難民」〕……………越智義寛 104
- ④ 授業づくり実践 数学Ⅰ〔難しい問題にチャレンジする〕……………浜崎美保 111
- ⑤ 授業づくり実践 数学Ⅱ〔数学における課題設定の工夫〕……………福本茂男 117
- ⑥ 授業づくり実践 生物〔生徒の「わかった」を願って課題をつくる〕……………前田香織 123
- ⑦ 授業づくり実践 物理〔「ジャンプ問題」について考える〕……………長野 修 130
- ⑧ 授業づくり実践 英語ライティング〔「英文構造分析法」を武器に学び合う〕……………磯山 馨 138
- ⑨ 授業づくり実践 英語リーディング〔詩の授業における協同の課題〕……………沖浜真治 145
- ⑩ 授業づくり実践 家庭科〔身近なものを見直し、気づきを生活に生かす〕……………榎府暢子 151
- ⑪ 授業づくり実践 音楽〔卒業後の生徒の姿を思い描いて〕……………白井博美 158

コラム

- ▽ 社会科研究室の会話―公民科の授業デザインをめぐる― 金子 奨 165
- ▽ アトリエの中の学び合い―美術で思考を深め、広げる― 小澤 功 170

おわりに

草川剛人・浜崎美保

第1章

高校改革の課題

—学びを中心とする授業へ—



一 教室の実実から

授業の実実を直視するところから出発しよう。厳しい現実を直視することは勇気のいることであり、その現実を引き受けることは高い精神性を必要としている。これまで多数の高校を訪問し授業を参観してきたが、暗澹たる思いにかられることが多かった。授業としては成立しているのかも知れないが、学びが崩壊しているのである。その現実には、「進学校」と言われる高校でも「底辺校」と呼ばれる高校でも同様である。

「進学校」の教室の授業風景を描写してみよう。生徒たちの半数は授業に参加しているが、教師の説明を聞き板書をノートに写しているだけで、まっとうに思考し探究しているわけではない（オートスキナー?）。数学の解法を理解しても、数学的意味を理解しているわけでもなければ、その発展性を認識しているわけでもないし、数学の学びの快楽を享受しているわけでもない。生徒たちはこの奴隷のような状態に疑問を抱いていないし、学びの主権者となって学問が批判的創造的行為であることを学んでいる生徒もいない。

そのかたわらで3割ほどの生徒はひたすら「内職」をしている。ひどい教室になると、7割近くの生徒が「内職」に精を出していることもある。彼らは学校でいたい何を学んでいるのだろうか。多少なりとも「後ろめたさ」を感じているのだろうか。あるいは、その「後ろめたさ」について、一度でも深く内省したことがあるのだろうか。彼らは「内職」という一種の裏切り行為によって誰を裏切っているのだろうか。「内職」という一種の商いによって、誰とどのような「取り引き」を行っているのだろうか。これらの生徒にとって高校で学ぶことは何を意味するのだろうか。そして、そのように教師との絆も仲間との絆も断ち切った孤立した世界に自己を投入して学ぶことによって、彼らはどのような大人に成長しどのような社会を築いてゆくのだろうか。

そのかたわらには2割程度の突っ伏した生徒、あるいはおしゃべりや携帯に没頭して授業に参加しない生徒たちがいる。彼らにとって授業は「休憩」でしかない。塾や予備校に備える「休憩」、放課後の遊びやアルバイトに備える「休憩」である。

「底辺校」と呼ばれる学校の授業も同様に深刻である。かつて「底辺校」の教室は、おしゃべりが支配していた。このおしゃべりは「わからないことによる疎外」の表現であったし「学びからの逃走」であったが、そのうちつつぶしてしまう生徒が増えていった。このつつぶしは「わからないことへの絶望」と「教師からも仲間からも見放された孤独」を背中で表現していた。しかし、近年「底辺校」の教室の風景は変わってきた。今ではおしゃべりの生徒は数人しかいないし、つつぶしている生徒もわずかである。ほとんどの生徒は板書をひたすらノートに写している。教師が赤のチョークを使えば、すぐに赤のボールペンに持ち替える。何も考えないで機械的にノートをとる生徒たちは、もはや奴隷状態からロボットに移行してしまっただろうか。

教師の危機はそれ以上に深刻である。教師は誰しも、生徒たちに学びの喜びを感じとってほしい、その教科（学問）の真髄を学びとってほしいと願っている。にもかかわらず、誰一人学びを成立させていない教室で1日に何時間も一人で話しかけ、誰一人歓迎していない授業を日々繰り返している。いくら熱心に授業を行っても、生徒の学びが期待どおりの結果をもたらさないとすれば、ついつい生徒の愚痴を言いたくなるのが当然なのかもしれない。しかし、まずい料理を提供して食べない客を責めるのは料理人として失格である。「本当の料理はおいしいのに客はわかっていない」「そもそも食べる意欲がない」と愚痴を言うのであれば、さらに失格である。料理人は「おいしい料理」を提供しなければならぬ。これは高校教師にとって笑い話ではない。教師が専門家であるとすれば、なおさらである。治療の不備を患者の責任にする医師がいるだろうか。

それでも教師たちが精神に異常をきたさないで授業を行っているのは、なぜだろう。生徒と同様、教育に対

するシニシズムと生徒への不信が無意識のうちに染み込んでいくからではないだろうか。「教育なんて、授業なんて、どうせこういうものさ」「どんな授業をしても、この生徒たちが学びに夢中になることはありえないし、学問の深淵しんえんに魅了しんえんされることもありえない」と。

しかし翻って考えてみる必要がある。この現実には教師たちの怠慢によって生み出されたものではない。むしろ授業の最大の被害者は教師自身なのかもしれない。生徒たちは3年でこの巣窟から脱け出すことができるが、教師は何十年もそこに縛りつけられたまままで粉引きの臼のように授業を続けなければならないのだから。

毎年、10冊以上の本が退職直後の高校教師たちから送られてくる。自費出版が多いのだが、「我が教師人生に悔いなし」「我が教職生活の幸福」を綴った貴重な記録である。しかし、いつも疑問に思うのだが、その記録に授業実践のことが記されていない。文化祭、体育祭などの学校行事、生徒指導、部活の指導、進路指導の思い出は記されていても授業の風景がない。どの教科の教師であったのかさえもわからない本も多い。それら高校教師の自伝を読みながら、この教師たちは教職生活において本当に幸福だったのだろうか、思い悩んでしまう。「教育者自身が教育されなければならない」（マルクス）のであり、授業の呪縛からの教師自身の解放が改革の出発点になるのだろうか。

二 一斉授業からの脱却へ

私の高校生活は例外だったのだろうか。高校時代の私は、抑圧的で権威的な教師たちに単独で反逆し退学直前まで思いつめたが、その高校生活ももう一面では輝くような学びに彩られていた。生物の青木先生は、当時の教科書も記載していなかったDNAを一年間の教材とし、辞書のような厚みのアメリカの革新的教科書BSCS（英語）をテキストとして小グループの協同的学びによる探究学習を実践された。私たちは夢中になっ

て、この英語テキストを片手に探究し合い学び合った。音楽の杠先生やんぱは卓越した音楽性で生徒たちを魅了した。私は杠先生にヴォイオラを学んでオーケストラに参加し、杠先生編曲の弦楽合奏を愉しみ、弦楽四重奏団を組織して市内で演奏会を行った。さらに国語の金谷先生と横山先生は文学鑑賞と文芸批評の素晴らしさで生徒たちを文学の虜にしたし、他にも歴史研究、数学研究、スポーツ科学など、私の学びを夢中にした教師は数多い。地方の自由な校風によるものだろうか。時代の息吹だろうか。私を含む少数の生徒は高校紛争の洗礼を受けたし、生徒会は占領下にあった沖繩から高校生たちを招待して「米軍基地」について真剣に議論し、翌年には日本最初の沖繩への修学旅行を実現させた。これらの経験が、今日にいたる私の学びの軌跡の一里塚になっている。このような至福の学びを現代の高校生はどれほど享受しているのだろうか。高校教師たちはどれほど提供しているのだろうか。

残念なことに、日本の高校の授業の支配的なスタイルは旧態依然とした一斉授業であり、私の高校時代と少しも変化していない。社会がこれほど変化し、文化と教育の環境がこれほど変化したにもかかわらず、なぜ高校の授業スタイルは一斉授業のまま変化しないのだろうか。

日本の高校の授業が一斉授業に固着していることは、国際的に見れば異様である。すでに先進諸国においては、机が前に向いて一列に並び黒板と教科書を中心に教師が一方的に説明する授業は博物館に入っている。少なくとも高校においては、一斉授業はアフリカ諸国や中近東などの途上国か北朝鮮と韓国とロシアと中国でしか残存していない。

グローバルゼーションによって、カリキュラムは「プログラム型」から「プロジェクト型」へと移行して「思考・探究中心の学び」へと転換し、授業スタイルも一斉授業から協同的学びへと転換している。それにもなつて教師は「教える専門家」から「学びの専門家」へと転換し、授業研究は「学びのデザイン」とリフレク

「シヨーン」の研究へと移行している。

日本の授業改革の遅れは深刻である。PISA調査は学力水準と同時に、授業と学びの実態についても詳細な調査を行っているが、数学の授業と学びに関する2010年の調査報告書では、65の調査対象国・地域において日本と韓国の2つの国だけが「協同的学び」の導入において著しく遅れている。(日本は韓国より協同的学びの導入率は低く、世界最低である。)65の調査対象国にはアフリカ諸国や東南アジアや中近東の国々も含まれていることを考慮すれば、日本の授業の一斉授業の呪縛は深刻と言わなければならない。(Mathematics Teaching and Learning Strategies in PISA, OECD, 2010)

他にも憂慮すべきデータがある。「高校生の勉強に関する調査」(一ツ橋文芸教育振興協会、日本青少年研究所 2010年)の日、米、中、韓の比較調査によると、どの項目を見ても日本の高校生は学びにおいて消極的、受動的である。たとえば「どのような授業が好きですか」の問いに対して、日本の高校生が最も好きな授業は「教科書の内容をきちんと教え、覚えさせる授業」(71%)であり、「学校外での見学や体験を重視する授業」(米国86% 韓国78%)「生徒の観察力や応用力を発揮させる授業」(中国96%)と比べて受動性が強い。「生徒によく発言させる授業」を好きな日本の高校生は33%であって、米国(73%)、中国(92%)、韓国(52%)と比べて著しく低い。さらに「授業中積極的に発言する」と回答した日本の高校生はわずか14%であり、米国(51%)、中国(46%)と比べてかなり低い。他方、「授業中、居眠りをする」と回答した日本の高校生は45%にのぼり、米国(21%)中国(5%)より多い。

この消極性と受動性は日本の高校生の無力感から生まれている。「私の参加により、変えてほしい社会現象が少しは変えられるかもしれない」という同じ調査の項目に対して、日本の高校生は30%しか同意しておらず、米国(70%)韓国(68%)中国(63%)と比較して社会参加に関する無力感がきわだっている。

さらに2005年に東京大学の研究グループが行った高校生の学習実態の調査によれば、授業時間以外の高校1年生の59%が「ほとんどしていない」と回答している。高校3年になると「ほとんどしていない」は41%に減少するが、高校1年で授業時間以外の学習時間が1時間以下の生徒は89%に達している。世界の高校生の平均が3時間以上であることを考えれば、日本の高校生の学びからの逃走は深刻である。

しかし、同じ調査は高校生の学びの潜在的な可能性も示唆している。高卒5年目(大学1年)に高校生活を振り返って「高校教育の在り方への意見」を求めた質問に対して、「教科にこだわらず幅広い経験をする機会」を求める回答は67%であり、「基礎的な学力をきちんと修得」(44%)「生徒にあった勉強・部活」(45%)「進路指導にあった時間」(29%)「将来の職業にあった教育」(33%)「教科の指導を厳しく」(5%)よりもはるかに多い。学びの改革への潜在的な可能性が示唆されていると言ってよいだろう。

それにしても、いったい、なぜ、日本の高校の授業は学びを抑圧したまま、旧態依然とした一斉授業に固着しているのだろうか。そこには複雑な政治的、社会的、文化的な要因と背景があり、簡単に説明することは不可能だが、少なくとも次の事柄は指摘できるだろう。

その第一は、高校の授業改革に誰も責任を負ってこなかったからである。文部科学省は学習指導要領は作成するものの、授業の改革と教師の研修については小学校と中学校しか責任を果たしてこなかった。高校の教育費は9割が都道府県財政によっており、都道府県の権限として文部科学省は立ち入ってこなかったのである。他方、都道府県教育委員会は、戦後長らく高校進学率の急上昇に対応する高校の「整備拡充」が政策の中心であり、その後は「受験制度の改革」しか対応してこなかった。その結果、欧米諸国では高校の授業研究は小学校、中学校と同様、もしくはそれ以上に活発であるのに対して、日本では皆無に近い状態が続き、さまざまな国際比較調査を見る限り、日本の高校の授業研究(研修)の機会は世界最下位に落ち込んでいる。

教育行政だけの責任ではない。私を含む教育学者の責任も大きい。学校を訪問し授業研究を教師と協同で推進する教育学者は小学校を中心に行っており、高校を訪問し教師たちと協同している教育学者は数えるほどしかない。高校は、教育行政からも教育学からも見放されてきたのである。

学校経営の問題もある。OECDのPISA調査では「校長のリーダーシップ」の比較も行われているが、その結果を端的に表現すると、日本の校長は校長室で仕事をしているのに対して諸外国の校長は教室を訪問して仕事をしている。校長室よりも教室にいる時間が長い校長が国際的には一般的であるのに対して、日本の校長が教室にいる時間は圧倒的に少ない。なかには教室を訪れていない校長も存在する。生徒一人ひとりの学びの成長と教師の授業実践の向上に対して校長が責任を負っていないのである。

高校の授業改革が困難なのは、これら一連の構造を改革する必要があるからである。しかし、その出発点をどこに求めればいいのか。

三 学びの改革へ

「学びの共同体」の高校改革は、教室の現実から出発し、21世紀型の高校を創出する改革のビジョンであり哲学であり活動システムである。

あらゆる改革における第一のプライオリティはビジョンにある。どのような学校を創造したいのか、どのような教室を創造したいのか、どのような学びを創造したいのか。このビジョンにおいて「学びの共同体」の改革は、公教育のミッションにもとづいて「一人残らず生徒の学ぶ権利を保障し、その学びの質を最大限に高める学校」、「一人残らず教師も学び、教育の専門家として成長できる学校」、「大多数の保護者に信頼され、保護者・市民と協同で学びの共同体を築ける学校」を標榜してきた。そして、「公共性の哲学」「民主主義の哲

学」「卓越性の哲学」の3つを掲げ、この3つの哲学を子どもと教師と保護者が実践するために、「教室における協同的学び」「教師間における同僚性の構築」「保護者参加の授業改革（学習参加）」を活動システムとして提示してきた。

その中核にあるのが「学び」の実現であり、「学び」を創出する対話的コミュニケーションであり、その対話的コミュニケーションを可能にする「聴き合う関係」である。

学びは3つの対話的实践であり、対象世界との対話（世界づくり）、他者との対話（仲間づくり）、自己との対話（自分づくり）の実践である。しかし、高校の教室ではこの対話的实践としての学びが疎外されている。学びの疎外は3つの次元で生じている。〈学びの対象性の喪失〉〈学び合う仲間の喪失〉〈学びの意味の喪失〉である。この3つの疎外を克服する実践が「学びの共同体」の実践である。そして、この「学びの共同体」の実践が、生徒においては「教室における協同的学び」であり、教師においては「授業研究による同僚性の構築」である。

高校において「学びの共同体」の改革が開始されて12年になる。この改革は、高校の教室の風景を一変させた。コの字型の生徒の机の配置や男女混合4人グループの協同的学びという物理的な配置の変化を言っているのではない。コの字型の机の配置や男女混合4人グループという物理的配置は、学びの改革の「装置」であった改革の「目的」ではない。教室の風景が一変したのは、生徒の学びそのものである。どの高校においても、どの教室においても、一人残らず生徒たちが夢中になって学びに没頭している。どの生徒も仲間に対する細やかな心遣いでケアし合い、一斉授業や個人学習では想像すらできなかった高いレベルの課題に挑戦し、その課題を達成している。「学びの共同体」の改革のビジョンと哲学は、どの高校においても教師たちよりも先に生徒たちが体得し、生徒たちが教師たちの専門家としての成長を支えてくれる。実際、高校においては生徒の

学びの改革よりも教師の授業の改革の方がはるかに困難なのだから、生徒たちが先行して「学びの共同体」を体得して教師たちの授業改革を協同で推進することは、しごくまっとうな筋道なのである。

「学びの共同体」における協同的学びは、決して「方式」でもなければ「処方箋」でもない。それはヴィジョンであり哲学である。そして協同的学びが成立するには3つの要件が必要である。この3つの要件を備えなければ、協同的学びは単なる「意見交流」になったり「おしゃべり」になって、学びが成立しない「話し合い」に墮してしまふ。

「協同的学びの3つの条件」とは、「真正の学び (authentic learning)」と「聴き合う関係」と「ジャンプのある学び」の3つである。「真正の学び」とは〈対象性の回復〉であり、教科の本質に即した学び、別の言葉で言えば「科学する学び (doing science)」であり「数学する学び (doing mathematics)」である。「真正の学び」を実現するためには、生徒の学びを「〇〇的 (数学的、文学的、音楽的など) 活動」として組織する必要がある。

「聴き合う関係」は対話的コミュニケーションの基礎であり、応答的 (responsive) 関係によって構成される。学び合いに必要なのは「話し合う関係」ではなく「聴き合う関係」である。「聴き合う関係」を教室全体に築くことによって「学び合う関係」が創出され、すべての生徒の参加が可能になる。

「ジャンプのある学び」は教科書レベル以上の課題に挑戦する学びである。学びの課題は生徒の発達レベルに応じて設定されるのではなく、その生徒が仲間や教師の援助によって達成できる高いレベル (発達の最近接領域 (ヴァイコツキー) の上限) に設定されなければ学びを成立させることはできない。一般に高校の授業における課題レベルは低すぎる。教科書に書いている知識レベルではなく、その知識を協同で活用して挑戦できる上限のレベルに設定されるべきである。「学びの共同体」の授業において、どの生徒も夢中になって学びに参

加している1つの条件は、この「ジャンプの課題」におけるレベルの高さにある。

四 改革の展望Ⅱ 同僚性を育てること

協同的学びに対する生徒たちの適応は早い。上記の3つの条件 (真正の学び、聴き合う関係、ジャンプのある学び) を備えた協同的学びをどの授業においても導入すれば、1か月か2か月ですべての生徒たちが学びに夢中になって参加する教室が出現する。

授業の改革において困難なのは、どの教師も協同的学びを中心とする授業を実践する教師たちの成長を達成することである。

小学校と異なって中学校、高校は教科担任制であり、一部の教師が授業の改革を推進したとしても、その効果は限られてくる。生徒の立場に立ってみると、相反する2つの学び方をチャンネルを変えるように教師に合わせて授業ごとに変えなければならぬ。しかし、教師たちが学年単位で授業改革を進めるならば、相乗効果によって生徒の学びは一気に向上する。

しかし、高校における「学びの共同体」の学校改革は、小学校、中学校以上に複雑な困難を抱えている。その最大の桎梏は、高校における同僚性の欠如にある。事実、高校改革において最も重要であり、最も困難なのが同僚性の構築である。

なぜ、高校では同僚性の構築が困難なのだろうか。その要因の1つは高校教師の個人主義の文化にあり、その根底には教職専門性の未成熟がある。高校の教師は、教科 (学問) の専門主義 (specialism) が強く、教師としての専門文化 (professionalism) の伝統が薄い。しかし、教師は教科の専門家 (specialist) である以上に教育の専門家 (professional) でなければならぬ。高校教師は学問の研究者ではなく、教科の教育者なので

ある。「学びの共同体」の学校では授業研究を教科単位ではなく学年単位で推進している。教科の専門家から教育の専門家への転換をはかるには、教科単位で〈教材研究と授業研究〉を行うのではなく、学年単位で〈学びのデザインとリフレクションの研究〉を行う必要がある。高校にも小学校と中学校と同様、〈学びのデザインとリフレクションの研究〉としての授業研究の伝統を育み、一人残らず教育の専門家として育ち合う同僚性を育てる必要がある。

高校において同僚性が築きにくいもう一つの要因は、教師組織におけるバルカナイゼーション（バルカン諸国化）がある。高校の教師組織は、教科単位、分掌単位、部活単位によってバルカン諸国のように小国が自立性を競い合って乱立している。これらの小国の壁は権力装置であり、誰もその権力装置を取り除くことはできない。このバルカナイゼーションの被害者は生徒たちであり、教師たちもこの壁によって相互に孤立している。教室の生徒の学びが消極性と受動性で特徴づけられる学校は、どの学校もバルカナイゼーションによって教師たちが分断され孤立している学校であり、教師が会議と雑務に追われ、授業研究と教師の研修が脇に追いやられている学校は、どの学校もバルカナイゼーションによって、学校のミッションの中心が空洞化している学校であり、校長のリーダーシップと責任が空洞化している学校である。

「学びの共同体」の学校改革は、部分的改革ではなく全体的で構造的な改革である。今日の官僚主義化され分業化された高校を民主主義的で協同的な高校へと変革する改革であり、一人残らず生徒の学ぶ権利を保障し、その学びの潜在的可能性を現実性へと転換し、学びにおける〈質と平等の同時追求〉を達成する改革であり、一人残らず教師たちが教育の専門家として成長し合う同僚性を校内に樹立する改革である。

私たちは、これまで多数の高校において、教師たちと生徒たちと協同して〈もう一つの教室の風景〉〈もう

一つの学校の風景〉を創出してきた。本書は、その具体的な姿を活写している。本書に提示された学校改革と授業改革の実践事例を踏み台にして、一人でも多くの教師たちが、この〈21世紀型の学校〉づくりの挑戦を開始することを期待したい。21世紀を生きる生徒たちは学びの主権者として育つことが求められており、学びの主権者として育つ生徒たちが、明日の民主主義の社会を準備する。その生涯にわたる学びの第一歩を「学びの共同体」の学校改革は準備している。

（佐藤 学）

【参考文献】 佐藤学 『学校を改革する―学びの共同体の構想と実践』（岩波ブックレット 2012年）

第2章

学校づくりの実践



1

生徒の学びが教師を変える

（東京大学教育学部附属中等教育学校・宝仙学園中学・高等学校校女子部）

一 2007年ある日の授業風景

東京大学教育学部附属中等教育学校（以下東大附属と略記）の南校舎3階の教室で6年（高校3年）の選択日本史は始まる。24名の生徒がコの字型に座っている。あいさつの後、A3判のワークシートを配る。そこには「6年日本史（by 艸）3. 惣村の発展と応仁の乱」（産業の発達、商業の発達、惣村の発展、土一揆・徳政一揆、応仁の乱、下剋上の社会）p. 137～143」と書いてあるだけだ。教科書は『日本史B』（実教出版）と資料集が使われる。資料集は学校で買わたもの以外に2～3種類を用意している。異なる資料集を見て生徒が多面的に歴史事実を追求するためである。

私が問いかける。「惣村の発展と応仁の乱」とあるね。この「と」は何だろうか？この題名を1つの文にしてみよう。浅井くんどう？」浅井くんが「惣村が発展して応仁の乱が起こった。」「そうだね、でも惣村が発展すると応仁の乱が起こるのはなぜだろう？それにはね、小見出しを全て1つの文にしてみるとわかるよ。遠藤さん、挑戦してみる？」遠藤さんが「産業や商業が発達すると惣村が発展し、土一揆・徳政一揆が起こり、応仁の乱も起こって下剋上の社会になった、これでいいですか？」「すごいね、6つの小見出しが一文になったね、これでいいかな。」遠藤さんが何か言いたそうなので「どうぞ」と促すと「先生、『産業の発達、商業の発達』

と『惣村の発展』になっていますが、『発達』と『発展』の違いは何かな、と思っちゃいました。」「鋭いね、じゃグループで今の遠藤さんの疑問も考えてね。ではグループになって。」「こうして4人グループでの音読が始まる。4人グループの中で記録者を決めて、教科書を段落ごとに順番に読んでゆき、読めない字や意味のわからない言葉を4人で考え、辞書を引き、資料集を見て教科書の本文を理解してゆく。この授業は、産業の発達と商業の発達という経済的変化が惣村を進展させ、惣村を基盤として土一揆・徳政一揆が起こり、他方將軍継嗣問題を契機に、守護大名同士が京都を中心に11年間もの長きにわたり戦いを続け、山城国一揆や加賀の一向一揆などの下剋上の社会が出現し、戦国時代へ移ってゆく変化を捉えることを目的にした。

約35分間で各グループから1枚ずつ教科書をまとめたシートが提出された。集めて4枚ずつコピーしてすぐさま教室に戻り、自分のグループのシートを各自が持つていられるようにした。つづいて各グループの発表に移る。峰尾くんのグループが「138ページに揚水の絵が出ています。牛馬の使用とか二毛作の普及などで生産力が上がったことと『都市向けの商品生産がすすんだ』とあるのでこのことが商業の発達に繋がるんじゃないかと考えました。」と発表した。私は「そうだね、では惣村が発達するのはなぜかな？」と発表内容を深める質問を全体に投げかける。いつもグループのワークシートに「チーム永沢」と自分の名前を書く永沢くんが口を開く。「辞書で引いたら『発達』は『進歩して規模が大きくなること』で『発展』は『のびひろがること、さかえゆくこと』とあるので産業や商業の規模が大きくなることで、惣村は広がりさかえたということになります。」

「でも、その2つの関係をもっと教科書の本文から捉えるとどうだろう？」と私は、歴史的な根拠を示すように促した。ここで遠藤さんが「140ページに『あたらしく成長してきた小百姓が参加しはじめ』とか『百姓たちは彼らのなかから惣の指導者としての乙名・年寄・沙汰人などを選び』とあるから農業を発展させて農

民に自信がついたんだと思う。」と発言した。「いいところに気がついたね。」とさらに発言を促すと、「先生、惣掟が資料として載っています、農民が自分たちで惣村の決まりを決めています。」と根拠を示してきた。さらに片山さんが「その先に『また領主に対して惣請（百姓請・地下請）などの形をとって年貢の納入を請け負うこともしばしば行われた』とあります。」と言う。私は、深めるための質問を試みた。「鎌倉時代と室町時代に出来た『○○請』とは何だった？」吉永くんが「ええっと、地頭請と守護請です！」と素早く答える。教科書をまとめている中で、キーワードやおおよその歴史の流れは、みんな理解できているようだ。

次第に、生徒同士が疑問を出し合って歴史観が深まっていく時間が訪れる。「141ページに『正長の土一揆は京都周辺の庶民が蜂起して酒屋・土倉・寺院をおそい、売買・貸借証文を焼き捨てた』と書いてあるけど、『庶民』てだれ？農民のこと？」横尾美紀さんの疑問に、別のグループにいる双生児の姉の横尾美佐さんが「庶民でいろいろな人のことだから、農民も入るんじゃない？」と答えた。すると、美佐さんと同じグループの松尾くんが「うん、同じページの『正長の土一揆』の資料に『天下の土民蜂起す』とあるよ。『土民』とは農民のことじゃないの。下の注②にも『土一揆のうち、貸借関係の無効（徳政令の発布）を要求するものを徳政一揆という』と書いてある。」美佐さんが「教科書ってわかりにくい、農民やいろいろな人＝庶民で書けばいいのに。」松尾くんが「『庶民』て書いたのはそれだけいろいろな人が参加したっていうことなんじゃないか。」ここでチャイムが鳴った。

二 「学びの共同体」と出会って

前述のような授業をするきっかけとなったのは、2004年11月25日、静岡県富士市立岳陽中学校の校内研修公開に、当時勤めていた東大附属の数学科の小張朝子教諭と参加したことである。富士山の裾野の見える教

室では、生徒たちがコの字型に座り、教師の合図で男女4人グループになり、一人残らず課題に取り組んでいた。静かに語りかける先生と静かに考え学び合う生徒がいた。

中三の国語では松尾芭蕉が「閑かさや岩にしみいる蝉の声」の句を作る前の5つの草稿を読み、なぜこの句に決まったか、杉澤先生の問いに生徒は答えてゆく。授業の途中でコの字に席を戻したとき、保奈美さんがつぶやいたが、小さな声だったので気づかない。杉澤先生は「今ね、保奈美さんが素敵なことを言ったよ、みんなで聴こうね。」と言うと、保奈美さんは前よりも少し大きな声で「『岩にしみいる』ってどういうこと？」と言った。みんなはそのことをまた考える。保奈美さんは嬉しそうに笑った。

どの教室でも教師が一方的に説明するのではなく、生徒の疑問や教師が出した問いを生徒がグループで探究し、表現する授業が行われていた。午後には、体育、数学、英語の中心授業がおこなわれ、その後の研究協議会では授業を見た岳陽中の先生方一人ひとりが「生徒がどう学んでいるか」を話し合っていた。授業についての評価や教師の発問や板書についての言及はなかった。「校内研修公開」という呼び名に納得がいった。私たち見学者はその研究協議を聴くのである。

これまで私が経験してきた授業研究会とは違っている。この学校はどうしてこのような授業ができるのだろうか？これまでに私が見てきた班学習やグループ学習とも違う、私がかつてきた「やりとりのある授業」とも違う。こんな思いをもって佐藤学先生の講演を聴いた。佐藤学先生が一九八八年に東京大学助教授として東大附属の研究室にいられて以来の知り合いである。でも講演を聴くのは初めてだった。著書の『学び その死と再生』に共感したし、『授業を変える 学校が変わる―総合学習からカリキュラムの創造へ―』や『学力を問いただす―学びのキュラムへ―』は組合やPTAの学習会で読んでいた。しかし、講演を聴いて、先生が私たち教師の仕事について深い理解を示され、細やかに温かい態度で接してくださることに驚き、感動した。なか

でも「教師の責任は、『いい授業』を行うことにあるのではなく、生徒一人ひとりの学ぶ権利を保障し、学びの可能性を開くことにある」には衝撃を受けた。以来この言葉こそ「学びの共同体」の哲学の核心ではないかと思っている。この日、岳陽中で買い求めた『公立中学校の挑戦 授業を変える学校が変わる 富士市立岳陽中学校の実践』を開くとやはりこの言葉があった。この日、岳陽中学校で私は佐藤学先生と「本当に出会った」のだと今でも思っている。

三 スタートまで

2004年12月20日、東大附属の終業集会の日に小張教諭がパワーポイントで私がプリントで先生方に岳陽中学校内研修公開の報告をした。冬休みに入り「東大附属改革のヴィジョン(案)」作成に取りかかった。これまでに作成され承認されていた「将来計画構想」と「基本構想」も参考にしながら「学びの共同体」をめざす方向で作成した。年明けに佐藤学先生を教育学部長室に訪ね、「東大附属改革のヴィジョン(案)」について相談に乗っていただいた。2005年1月21日は前期課程の三橋俊夫副校長と5名の教員が岳陽中学校の内研修公開に参加した。1月27日には運営委員会(校長、前・後期課程副校長、運営委員2名を構成メンバーとする東大附属の執行部)に提案し、承認を受けて放課後の校内研究会で先生方にヴィジョンを報告し質問を受けた。

しかし、「学びの共同体」の必要性は意外なところから現れた。2005年1月29日に「東大附属で伸ばしたい力とは part 2」のテーマで開かれた第3回三者協議会の場である。三者協議会とは年に3回、生徒・保護者・教員の有志が一堂に会して協議する会である。東大附属の教育にかかわるテーマの1つについて生徒を中心に三者が協議し、生徒は生徒会に、保護者はPTAに、教員は職員会議に持ち帰って協議して提案

し、最終的に職員会議で決定するというシステムである。「開かれた学校づくり」を提唱する浦野東洋一元校長(東京大学名誉教授、帝京大学教育学部長)が2000年度に提案し、2001年度から行われてきた。この日の三者協議会では生徒のカリキュラムアンケートのうち東大附属の特色の1つである「総合的な学習」について協議した。生徒たちは、総合学習で調べる力や発表する力や文章を書く力がついた、と総合学習を評価した。しかし、高1の生徒が「総合学習では自信がつかない」と発言すると、教員が「あなたは私の授業で今週も予習をして来なかった。自信がないのはそのせいではないの?」と言うと発言した生徒は下を向き、他の生徒たちも黙ってしまった。この状態に保護者から「今の先生の言い方はおかしいのではないか。」との意見が出され、司会者が生徒の発言を促した。生徒たちは「ある先生は前の方の生徒とだけ授業をしているので後ろの席にいる自分は授業に参加できない。」とか、「私の質問がよくないのか、答えてもらえない。」とか「双生児ですけど弟のクラスの英語の先生と僕のクラスの英語の先生の授業に差があるので前期と後期で変えてもらえたらいいと思う。」という意見も出された。保護者からは学校としてどうするのかの問いが出されたので、副校長として「学びの共同体」のヴィジョンを提案していることを明らかにした。

2000年度に中等教育学校に移行し、中等教育学校は入試で学力検査を行わないので生徒の学力のバラつきが以前よりも顕著になった、という現実もあるのではないかと意見が教員から出された。実際9月と12月の成績会議で4年(高1)・5年(高2)の2学年で120〜140名の成績不振者が出てしまう現実も明らかにされた。

1月中旬には佐藤学学部長から『公立中学校の挑戦』63冊が非常勤講師を含む全教員にプレゼントされていた。2月23日には教員有志で『公立中学校の挑戦』の学習会を開き、私がレポーターになり、教員13名が参加

した。翌24日には「学びの共同体」づくりのために佐藤学部長に職員会議においていただき、2006年度より大学院教育学研究科に学校教育高度化専攻を創設し、附属学校は大学院生の教育研究と実習の場として位置づけることの説明を受けた。質疑応答の冒頭に数名の附属教員から「私は講義式の一斉授業をこれまでやってきたので『学びの共同体』はできません。そういう教員はどうしたらよいでしょうか。」との疑問が出された。佐藤学部長は「附属学校の教員であれば哲学を変えてください。」と答え、ある教員は「そうであるならば辞めます!」と言い、会議室に緊張感が走った。副校長としての私は咄嗟に「先生ッ、辞めなくてもいいです。最後にやればいいですから。」と思わず叫んでいた。2008年にカリキュラム委員長として教育学研究科の大学院生チームのインタビュウを受けた前田香織教諭も「最初に佐藤学先生から『哲学を変えてください』と職員会議で言われたときにはやはり衝撃が走りました。」と述べている。

多くの教員は佐藤学先生の衝撃的な言葉に強い印象を受けたが、国立大学法人化後の附属学校を学校教育高度化専攻に位置づけてくれたのである。私は教育学部と附属学校の新しい連携が始まることを確信していた。教科学習に自信を持ってない附属の生徒や保護者の要望を満たすためにも「学びの共同体」は必要だとの考えを強くした。

3月15日の「一日研究会」の午後の議題に「『学びの共同体』づくり一年目の方針(案)」を提案し、全体↓担任会↓全体会で議論し、合意を得たいと運営委員会に提案し、承認を得て、「一日研究会」に臨んだ。「草川副校長は、私がきちんと授業をやっていることを信用してないんですか?」「東大附属の教員がなぜ富士市の中学校に学ばなければいけないのか?」という教員たちの強固な反対に思わず私もトーンダウンした。そのとき三橋副校長がこう言った。「先生方はいろいろなことをやってきたというが、現実が変わっていない。だからこれをやるしかないじゃないですか。草川先生、何をトーンダウンしているんですか!」三橋副校長のこの

一喝で我に返った。すると若い先生から「もう議論はいいでしょう。新しい学年で、新しい担任団で教室の机をコの字型にしてみましようよ。」との声が上がった。既にコの字型や4人グループを試している先生方からは「これはよさそうですよ。」という報告もあった。新しい担任団がそれぞれの学年の教室でコの字型に机を並べて試してから会議室に戻ってきた。私も三橋副校長もどうなることかと思いつつ、新担任団の意見を聞いた。全学年の担任団が賛成してくれた。三日後の終業集会で全校生徒に、午後のPTA総会で副校長から正式に話してほしいとの要望も上がった。

四 東大附属でのスタート

東大附属は1学年120名(男子60名、女子60名)で各学年に十数組の双生児がいる生徒数720名の規模な学校であり、国立大学法人東京大学教育学部の附属学校であり、教育学部と連携して教育実習と教育研究をミッション(使命)としてきた中高6年一貫教育の中等教育学校である。6か年を通じ「総合学習入門(1、2年)」「課題別学習(3、4年)」「卒業研究(5、6年)」で生徒の個性や自主性を育てているものの、高校入試がない分、「中だるみ」という問題に悩まされてきた。

「学びの共同体」をスタートするにあたり、1年目の改善点として次の3点を実施することとした。

- a. 教師の「声」「言葉」「身体」に柔らかさがほしい。子どもの話をじっくり聴く教師。怒鳴って統制する生活指導を捨てる。
- b. 教師が一方的にしゃべる授業を、小グループ活動を取り入れ、できるだけ「子どもの問い」探究「表現」の学びに変える。仲間で聴き合う活動を大切にする。
- c. 教員全員が年1回は授業公開し、研究協議会を充実させる。

この3点は『公立中学校の挑戦』の「3 緩やかな改革という行動を起こす」という節にそれぞれの項が岳陽中学校の実践を踏まえて解説されている。何度ここを読み返したことだろう！思い悩むといつもこのページを開いていた。

さらに授業公開と研究協議会を計画しビデオカメラの管理をしてもらうために学年主任を校務分掌から外し、授業研究中心の校内研修に専念してもらった。「附属学校始まって以来の変化」ということに躊躇する教員もいたが、学校という組織は新しいことに挑戦すれば、いつも「始まって以来」なのである。こういう点に保守的になる学校という組織の陥穽かんびょうがあると思う。

2005年度の第1回三者協議会のテーマは「『学びの共同体』ってな〜りに♪」だった。スタートして2か月半の手応えを生徒・保護者・教員の三者で振り返った。この日の参加者は122名。他に帝京大学教授浦野東洋一先生を初めとする学校評議員のメンバー5名と区内・外の区立中学校の校長先生と教員、東大教育学部の勝野正章先生が見守る中で始まった。いったいどんな声が出てくるか、不安と期待が相半ばする日であった。

生徒「初めは戸惑ったがグループで話し合いができる、自分の気付かなかった点がわかるのでいいと思う。(5年・高2)」「前を向いて受ける授業より緊張感があり、逆に集中力が増したと思う。(5年)」「歴史で、グループごとに話し合ったことが違うので発見できる。(4年・高1)」「やってこなかった子に見せてあげる。見せてあげたら相手も今度はやってこようと多少は変わると思う。(4年)」「人づきあいが苦手で話しかけれなかったが、『学びの共同体』で仲良くなれた。(1年・中1)」

保護者「授業参観をしたが静かだったことに感動した。(5年)」「わかる子の周りに集まって授業のようになってる。生徒が生徒を教えている。着実に進歩していると感じる。(5年)」「授業内容によっては黒板をな

くしたらどうか(1年)」「学校と先生に絶対の信頼を置いているので、先生も生徒も揺らがなくていいと思う。(1年)」

教員「ある子が英語はダメでも数学はできる、という発見がある。研究協議会で生徒を倍くらい知ることができた。(英語科)」「教室全体に圧迫感がなくフワツとして丸い感じの雰囲気になった。意見が出しやすいい雰囲気があるのが良い。(家庭科)」「発表しやすいい雰囲気、わからない子がわからないと言え雰囲気できていく。(数学科)」「学ぶ姿勢の変化、口の字型でもいい。今まで教員がしゃかりきで一人でやってきた。知的刺激を互いにし合えるとすごく楽しい。(国語科)」「授業が詰まっているところに他の授業を見に行かねばならないが、それ以上に得るものが多かった。(理科)」「(以上の意見は「東大附属PTA作成三者協議会報告(保護者版)」による。)」

実施二か月半の手応えは予想以上であった。私はこのことを高文研の『ジュ・パンス2005秋号』に紹介した。

1年目の2005年度の授業公開は公開研究会を含めて50回になり、2年目の2006年度は授業公開71回、研究協議会45回を数えた。2年前に定年退職され、2006年度の卒業式に来賓として参加された山岡寛人先生(理科)から「私がいた頃より生徒が静かに話を聴くようになってる」との感想をいただいた。「学びの共同体」の成果であると思う。成果はこれだけではなかった。2006年度の12月の成績会議では4年(高1)・5年(高2)の2学年での成績不振者が70名と半減した。他方、国公立大学と私立大学の上位校への合格者も増加した。私が担当した選択日本史受講者に訊くと「とにかく前よりも教科書や資料集をよく読むようになった。それというのも4人グループで難しい課題を協力して追求できるからだと思う(6年・高3女子)」と話してくれた。佐藤学先生が言われるように「進学実績は後からついてくる」のだと思う。

五 授業担当者として、副校長として

私が副校長として6年日本史を担当したことは、「学びの共同体」の授業改革を内在的に考える契機でもあった。大学、大学院時代に鹿野政直先生の近代民衆思想史を学び、教師になってから故黒羽清隆先生の日本史教育を知りその授業方法に憧れた。教師がしゃべる授業を改めるために菱刈隆永先生の日本史教育研究会に入り、生徒が発表する自己展開学習を授業に取り入れた。そうして私が25分話し、残りの25分を生徒とのやりとりで授業をしていた私は「学びの共同体」の日本史授業には苦戦した。2006年8月1日に秋田喜代美東大教授のお薦めで第3回教育のアクションリサーチ研究会の第1回高校部会で6年日本史「推古朝の政治と文化」を発表した。教科書をプリントし、授業ビデオと生徒と私のやりとりを起こしたプリントを用意して臨んだ。佐藤学先生がこの報告を一部始終見ていられてコメントされた。「草川さん、あなたはしゃべり過ぎ、『学びの共同体』を理解していません！」ショックであった、と同時に悔しさもあった。韓国の教師や保護者、マレーシアの教師たちも参加していた。韓国の教師の一人が「どうやら発表者は失敗したらしい。」の日本語が耳に響いた。とっさに私は失礼をも顧みず、「佐藤先生、先生ならこの教材でどういう授業をされますか、先生の授業案を示してください。」と叫んでしまった。佐藤先生は、教科書のプリントを見ながら、「教科書の最初に東アジアの変化が書いてある。僕なら生徒に簡単な年表を作らせる。次に遣隋使の資料があります。この資料を読ませて何がわかるかを考えてもらおう、最後に飛鳥文化の国際性とは何かをレポートにまとめてもらおう、これは宿題にしてもいいかな。」と答えてくださった。「目から鱗」であった。授業の内容を通してまたしても「私は佐藤学先生に出会えた」と思った。9月になって改めて「推古朝の政治と文化」を授業してみた。4人グループでの生徒の音読の後、私は「年表を作ってみよう。」とにかく資料を読んで何がわかるかを書き出してみよう。「飛鳥文化の国際性について資料集も読んでレポートを書いてみよう。」これだけを指示してあとは生徒に任せた。コの字に戻して発表してもらった。生徒は「すっきりしてよくわかる。」と言った。4人グループを見守りながら私も気持ちよかった。「学びの共同体」がわかった一時間だった。

副校長として授業を担当することは、教室で生徒と出会えることであり、先生方とともに学び合える機会を持つことでもある。「学びの共同体」を進めてゆくとときに私の授業も公開して見てもらい、ビデオに撮ってもらって研究協議会に参加することで先生方の創意工夫や生徒との接し方を学べる。時間数は少ないけれども同僚とともに授業で学び合いたいと思う自分があるのである。

2008年2月には、東京大学大学院教育学研究科の大学院生の4人がチームを組んで東大附属を訪問し、授業を見学し、研究協議会に参加し、カリキュラム委員長の前田香織教諭と副校長の私にインタビューをしてくれた。研究者の視点で「1. 授業改革（齊藤萌木氏）」「2. 授業から見える改革の現状（杉山二季氏）」「3. 校内研修（飯島裕希氏）」「4. 東大附属の学校改革におけるリーダーシップ（張建氏）」という4本の論文にまとめ、学校教育高度化専攻主催の研究会で発表してくれた。私たちが取り組んだ3年間の学校改革の特色と成果と課題が明らかにされた。東大附属と教育学研究科の新たな連携を感じることができた。

六 宝仙学園女子部の「学びの授業」

2008年3月、30年間の東大附属での教師生活を終えて、中野区内の宝仙学園中学・高等学校女子部に副校長として赴任した。1928（昭和3）年創立の歴史と伝統ある仏教系女子校の授業改革が私の着任理由であった。宝仙学園にはすでに「共学部理数インター」が発足していて、学校改革に着手していた。校長はイギリスソニーの社長として世界にトリニトロンテレビを広めた関谷五郎先生が着任していた。関谷校長は女子部

と共学部の校長でもあった。2007年10月に私の内定が決まると東大附属の公開研究会や当時私が講師として訪問していた茨城県立茎崎高校の公開研究会にも参加されるほど「学びの共同体」に注目していた。中学1クラス、高校1学年4〜5クラスの女子部を中学2クラスにして東大附属のような中高一貫校にしたいと理事長の要請があった。私はまず理事長を初め学園執行部に「学びの共同体」による東大附属改革のプレゼンテーションを行い、次いで職員会議で行った。職員会議でのプレゼンテーションの冒頭で「女子部の先生方の良いところを活かして授業改革を進めたい。私が高1日本史2クラスで4時間の授業をしますのでぜひ見に来てください。」と呼びかけた。

日本史の授業は山川出版の『高校日本史B』の近代「開国と幕府の滅亡」から始めた。コの字型にして「ペリー来航」「不平等条約」「開国後の経済混乱」の小見出しを1つの文にする、「ペリーが来航し、不平等条約が結ばれ、開国後の経済混乱が起こった。」というように。そして「それはなぜかを考えて4人グループで段落ごとに音読していこう。」と指示し、ワークシートを配付する。最初生徒は教科書の本文を読めなかったが、「家で練習しておいで。」と言い、5月の連休明けには何とか読めるようになっていった。3つの小見出しで6ページである。7月の期末テストの時の感想に次のようなものがあった。

「先生の共同体は授業のやり方として一番良いと思います。／絶対ねないし、分からなかったらすぐ友だちに相談してかいつつすることができます。／なのでこれからもこのやり方を続けてください。」「私は日本史がすごく苦手です！／おぼえるのむずかしいし、考えるのもいろいろを知っていないと理解できない。でもやはり勉強はいいものだと思います。」「学びの共同体は、まだなれていないけど早くなれて、もっと勉強ができるようになりたい。／まあ、もっとプリントと教科書を読もうと思った。」

ひらがなが多い感想ではあるが、それだけに生徒たちの思いが伝わってくる。関谷校長は校務の合間を縫ってよく私の授業を見学に来てくれた。先生方も半分くらいの人が見に来てくれて、徐々にやり始めた。2009年1月に女子部全体で行うことになった。学年ごとに教員グループを決めて授業公開とビデオ撮影、研究協議会を計画した。4台のビデオカメラと一脚を4本購入し、2009年6月には「女子校での学びの共同体の実践」という研究主題で佐藤雅彰先生を講師に迎え、第一回公開授業研究会を開催し、英語科の塩沢潔教諭が研究授業を行った。彦根西高校、沼津城北高校、岡山関西高校、富士市立田子浦中学校の先生方、中野区教育委員会、群馬県教育委員会、東京大学大学院生、朝日新聞記者など36名が参加した。講師を含めて『公立中学校の挑戦』50冊を購入し、非常勤講師の先生にも配付し、学習会も開いた。11月には、埼玉県立新座高校の金子奨先生を講師に公開授業研究会を行い理科の篠崎英弘教諭が研究授業を行った。広島県立安西高校、浜松江乃島高校、東大阪市立金岡中学校の先生方など27名が来校した。外部からの来校者に元気づけられて教師たちは授業改革に取り組んでいった。オープンキャンパスや学校説明会では私を含めて何人もの教師がコの字型、4人グループでの体験授業を行い、中学・高校とも受験生は増えていった。

しかし、2008年秋に起こったリーマンショックによる不況の影響で女子部の中学募集を停止することになった。そこには共学部理数インター副校長、教頭の意向もあった。女子部を縮小して共学部を拡大していくとうとする流れであったように思う。そのことは関谷校長の退職に始まり、女子部の中学募集停止となって表れた。「学びの共同体」による授業改革で東大附属のような女子の中高一貫校を創る方向は断たれてしまった。私が宝仙学園中学・高等学校女子部にいる理由はなくなった。関谷校長の退職に1年遅れて私も退職した。宝仙学園での経験は都立高校や東大附属では経験できないことが数多くあった。

その1つに「学びの共同体」は女子校でもできるということである。このことは2008年から講師として訪問している岡山県の男子校関西高校でも経験していることでもある。そこには何があるのだろうか。

「学びの共同体」をめざす学校づくり、それは現在の中・高校生たちが置かれている状況の改善をめざす取り組みにほかならない。中学で学びに出会えず、高校で「学びから逃亡する子どもたち」が多い。彼／彼女らが高校へ進学する理由は、高校卒業という学歴を得ることがその目的になってしまっている。その前にあったはずの、学びたい、わかるようになりたい、という欲求が少なくなっている。しかし、だからこそ自分の生き方を考えるとき、学びに出会いたい、高校に行けば学び直しができるのではないか、という期待も大きい。

これらの高校生の期待に「学びの共同体」の授業は応えることができる。第一に高校生の学びへの欲求であり、第二に各教科の専門家としての高校教師の力量である。この2つの条件を活かすことができるのが「学びの共同体」の授業である。欠けているのは生徒が学び合う授業と教師が授業を公開することによって授業を見合い、自分あるいは同僚の授業を振り返ろうと努力する教師たちの存在なのである。

「学びの共同体」に出会ったことは私にとって幸運であった。でも「学びの共同体」の授業が会得できるまでには、38年間の中学・高校社会科の教師生活のなかで一時は自分が長年やってきたことを否定されるのではないかと思ひ込む日々でもあった。そんな思いを振り払うことができたのは、グループで音読し、多すぎるかと思う課題を友だちとともに学び合う生徒の姿であり、迷いながらも授業を公開することで生徒たちの学び合いを成立させようとする先生方の姿であった。そうしてその節目節目に佐藤学先生に出会えた気がする。生徒たちの学び合う姿によって教師としての私が変わることができたと思う。迷いつつ書いたこの文章が、授業改革に挑戦する多くの高校の先生方やリーダーシップとときにはフォローシップと判断と決断を迫られる校長先生、副校長先生のヒントになれば嬉しい。

(元副校長・草川剛人)

2

ボトムアップの学校改革―滋賀県立彦根西高等学校―

「授業研究による学校改革」への挑戦

一 はじめに

私が90年代の約10年間を勤務した教職生活2つ目の高校は、ある卒業生が論文で「スバルタ進学校」と揶揄した受験・管理体制の徹底した高校だった。生徒会は100人規模の三者協議会に取り組むまでに力をつけたが、「授業の問題」を協議題として出した途端、「そんなことを言わせてよいのか」と教師たちは反発した。生徒会顧問の私は両者の間で苦悩した。授業は「聖域」だった。若者を社会と切り離れたかたちで大学進学こそが使命のように特化した高校のあり方ではないのかという問題意識は大きくなっていく一方であった。

そんななか90年代後半、次々と出版される佐藤学先生の「学び」に関する刺激的な論考に励まされた。「反省的実践家」「同僚性の構築」などの指摘は学校の課題を現場目線で考えることができ、これからの学校のあり方を指し示すものだった。しかし、私の実践の土俵は生活指導にあつて教科教育ではなかった。

二 困難のなかで進まなかった学校改革

「4階から掃除用具入れが落ちてきました」——本校への異動を希望したとき、知り合いたちが現状を伝えてくれたひと言がこれだった。近隣の高校が総合学科に改編されて以降、「坂道を転げ落ちるよう」に困難になっていったという。2002年春、この高校で生活指導実践をしようと意気込んで異動した。新入生の担任として入学式当日から悪戦苦闘の連続だった。このときから6年間、担任を続けた。

あるとき、再び佐藤先生の『教師たちの挑戦』で「学びの共同体」の拠点校が全国各地に誕生していることを知った。「日本でも始まっていたのか」と驚いた。それでも実践上の関心は生活指導実践で高校生と学校を変えることにあった。授業で生徒を変える、教科教育で学校を改革するという方向には行かなかった。

私は転動したその年から学校構想委員に選任され続けている。当時の構想委員会の議論は校内の深刻な課題に焦点化されていなかったもので、最初の会議で方向転換しようと同僚を説得した。とは言っても困難さは増す一方で議論は遅々として進まなかった。さすがに部活動や進学補習に特化した「特色ある学校づくり」という陳腐な話はなかったが、「ゼロトレランス」や「基礎・基本の徹底」を主導した学校長もおられた。構想委員会は具体策をまったく出せないまま6年が過ぎようとしていた。

三 「授業研究による学校改革」という衝撃

2007年度2月、私は長野県望月高校を訪問した。望月高校は小規模の「課題集中校」で、この頃出版された佐藤学先生の『学校の挑戦』で「学びの共同体」実践校として紹介されていた。聴き取ったことを職員会議に報告した。同僚はこのとき初めて「学びの共同体」という学校改革を知ることになる。

3月末、東大大学院・学校教育高度化センターが主催した「学びの共同体」拠点校のシンポジウムに参加した。シンポジスト全員が学校長であることに違和感をもったが、話を聴いていくうちに強い衝撃に変わった。なぜなら学校が授業研究ができる組織に改革されているからであり、改革のリーダーが学校長であったからだ。それまで学校長がリーダーシップをとって学校改革をするという実践構図は経験したことも耳にしたこともなかった。実践のパートナーを探る際、同僚だけに目を向けていたことが大きな弱点だったと気づいた。

折しも学校規模が縮小しつつあり管理職も学校改革に意欲的であった。「学びの共同体」の導入に向けて研究を始めるのは今しかないと強く思った。年度末ではあったが入手した分厚い報告書を教頭に手渡し「これはいきましょう」と声をかけた。教頭は新たに赴任が決まっていた学校長に了解をとりつけられた。1年かけて「学びの共同体」の研究をやるうという管理職2人の後押しのもと「研究の2008年度」がスタートした。

四 授業研究のスタート

「20年間研究授業なんかしたことがない」——「学びの共同体」導入前の同僚の言葉だが、私も含めてみんながこの状態からの出発だった。研究の推進は構想委員会が担った。

最初の授業研究会は、「新採」と「ベテラン」が同じ学級でおこなった2つの授業ビデオを見て感想を述べ合うというものだった。生徒の学びが発生したり深まったりする瞬間を捉えようと教室前方から生徒の表情を撮影した。教師の姿が写っていないのに、ビデオを見た同僚からは教師の教え方に対する指摘が相次いだ。ただ一人年配のTさんが「このとき、加藤さんが実にいい表情をした。」と述べたのが忘れられない。

夏休み、拠点校の広島県立安西高校で撮影してきたビデオを全員で見て、後日話し合った。それぞれが自分の授業不成立状況を吐露した。「こちら（教師）がおもしろくないのだから、生徒もおもしろくないだろう。」

「生徒の否定的な状況に負けてしまっている。」と自身の不甲斐なさも隠すことなく赤裸々に語られた。と同時に「教えることのできる生徒がいるのか?」「学力のある生徒は教えるばかりで学力向上につながらないのでは?」「学力の低い生徒は常に教えられることで安心してしまわないか?」「コミュニケーションをとれない子がいるためグループ分けが難しい。」「進度が遅くならないか?」「私語が増えないか?」等々のもつともな疑問とともに協同学習に舵を切ることへの不安や躊躇も見え隠れした。私を含めまともに応答できる者はいなかった。

五 授業研究の広がりや深まり

2学期から私は自分の授業に協同学習(「コの字型」「4人グループ」の机配置)を採用した。10月に教職員全員で私の授業を見て研究者と共に授業検討会をおこなった。「グループで教え合う場面が印象的」「グループで学び合いが機能しているのか」などグループの様子に焦点を当てた感想が出された。「グループで考えさせる前に個人で考えさせる時間をとっていたが、個人作業はグループでできることだから、教師の説明後すぐにグループにした方がよい。」「教師は『できた人はまわりの人に教えてあげなさい』と言わずに、SOSが出せない生徒に『まわりの人に訊きなさい』と指示するのがよい。』という研究者の指摘は新鮮だった。さらに個別学習と協同学習の違いを私たち自身が折り紙を使って体験的に理解できたこともよかった。

2学期末には、「いきなりか」という感はあるが、教頭の発案で県内への公開授業研究会を実施した。5限の全授業を公開し、6限に私の研究授業、その後、研究者とともに検討会という日程だ。この時の「公開して、成功させた」事実がその後の針路を決定づけたのかもしれない。

校外での研修も推し進めた。同僚35名中の31名が拠点校や研究会へ出かけた。これは拠点校のネットワークをもつ「学びの共同体」だからできたのだが、管理職の力がなくてはできなかったこともある。というのは、取り組みをさらに広げ深めたいという思いはあっても、日常の多忙さや同僚への遠慮のなかでモノ・コト・ヒトに具体的な動きをつくることはなかなかできるものではない。こうした思いを管理職が酌み取られ、啐啄(そくたく)時にコトが進んだといえる。2人の管理職の決断の早さとフットワークの軽やかさのおかげだ。

次年度からの実施にあたって佐藤学先生から次のような指摘をいただいた。学年進行での実施は教師の労力が3年間にわたるため疲労感が強い。やっている教師(やらなくてはいけない教師)とやっていない教師(やらなくてもよい教師)の無駄な気遣いが2年間続く。一気にやれば変わるのに、変わらない生徒、変わらない学校を合わせもち3年間両方をやっていく教師の苦労はたいへんであることなど実践的な指摘だった。それを踏まえて、①1、2年で導入、②全教員を6グループに分け、年間2回の授業研究会を実施、③学校全体で年間2回の公開研究会を実施という構想委員会の提案が決定された。

六 いまだ、道半ば——それでも授業風景は一変

スタートから4年経過した。「『学びの共同体』で学力は上がるのですか?」と訊かれる。「そんなことを目指してはいませんし、そんなことは調べていません。」と答えている。大学進学という一元的価値でランク付けされている高校制度のもとでは、一旦できた「困難校」というレッテルはたやすく変わるものではない。1日の学習時間が「0時間」の生徒は60%台、「1時間以上」は10%未満。アルバイトを「やっている」は2年生になれば半数を超え、しかもそのうち40%が「週4日」になる。ケータイの1日の使用時間「3時間以上」は約半数(うち「5時間以上」は26%)である。これらの数は導入時からそれほど変動していない。

それでも授業風景は一変したといってもよいだろう。かつては、眠る、私語する、黙々と板書事項をノート

に書き写す、というのが多くの教室風景だった。「学びの共同体」の導入で、机に突っ伏して眠る生徒はほほいなくなつた。女生徒の多い教室で私語に難儀することもあるが、どの教室でもわからない生徒が「教えて」と仲間へ声をかけ聴き合う姿がある。(詳細は本書の授業づくり実践「国語」紫雲智道氏執筆を参照。)毎年秋に実施するアンケートで1年生の6〜7割が「『コの字型』『4人グループ』の授業でこれまでより学習意欲が出るようになったか?」という問に肯定的な回答(「そう思う」「ややそう思う」)をしている。学年進行とともにこの肯定感を上げていければと思うが、そう簡単なことではない。いまだ道半ばである。

七 高校生をより深く理解できるようになった

授業検討会も徐々に変化してきた。導入当初は、「自分の授業方法が直接批判されていないように感じるのでありがたいが、どう改善していくべきかはわかりにくい。」と、相互批判を避けた遠慮気味の発言だったのかもかもしれない。しかし、いまは「『知識を貯め込む教育観』から少し脱皮して、『学び合う』ことの意味がわかってきたように思います。」というように自分の教育観の変容も話されるようになった。

さらに教師の生徒を理解するまなざしの変化がある。いままで否定的な側面を見せる生徒には「自己チューな子だ」「わがままなヤツだ」とレッテルを貼り、「何を考えているのかわからん」と投げ出してしまふこともあった。しかし、授業研究で佐藤学先生がおっしゃるところの「蟻の観察のごとく」生徒を見てみると、否定的なレッテルを貼っていた生徒たちが学び合いをリードしていたり、学習材を自分の生活と結びつけた意見を述べていたり、驚くような発見がたくさんある。それらを授業検討の場で自分の言葉で意味づけ物語ることを通してその生徒の生きる世界も見えるようになってくる。一言で言うなら生徒の生活世界を理解できるようになる。授業について研究することで生徒を見るまなざしが養われ、変わり、教育観も変容する。

八 小さい学校こそ革新的な仕事ができる

「2016年度に募集停止」という本校の統廃合が2012年の暮れに決まった。拙論をまとめながら「学びの共同体」による学校改革の先見性・進取性を確信すると同時に、コミュニティの規模の小ささが極めて重要な要素だったと思う。生徒や同僚がお互いのことを知っている関係こそが、革新的な仕事ができる土壌ではないかと思う。

(数学科教諭・夏原常明)

危機感と一筋の希望の中で

一 2003年彦根西高校困難のピーク

新米校長として滋賀県立彦根西高等学校へ赴任をしたのが、2008年4月であった。それまでの私は、数学科の教諭として普通科の高校を4校、教頭としてやはり普通科の高校を2校経験していた。自分の中では、普通科の高校については少しプロであるとの自信も持っていた。しかし、その自信は進学を目指す生徒とのかかわりの中で培ってきた自信であったことに気づくのに、そう多くの時間は要しなかった。今でも印象的であるのは、赴任早々一人の数学教師から「校長!校長!と挑発されても絶対怒つたらだめですよ。」という助言であった。

少しだけ時代をさかのぼって彦根西高校を紹介しておこう。2003年4月、各学年普通科5クラス、家庭科学科2クラス、1年男子132名女子164名、2年男子90名女子135名、3年男子97名女子134名で

彦根西高校はスタートしていた。しかしその年度を終えるときには、進路変更者が95名（1年生74名、2年生14名、3年生7名）、問題行動件数も136件にのぼっていた。この2003年が、数字的にも、先生方の印象でも彦根西高校が最も困難な時期であった。

この困難のはじまりは、1992年、彦根市内に普通科の新設校、河瀬高等学校が創設されたときに始まった。そして、決定的なダメージを受けるようになったのは、1998年、同じ彦根市内に総合学科の彦根翔陽高等学校が創設されたときであった。以来、定員割れ、不本意入学、目的意識の欠如といういわゆる課題の多い高校として歩むことになっていったのであった。そして迎えたピークがこの2003年度である。当時の第1学年主任は、私の教諭時代の先輩であったが「2クラス分の生徒がいなくなってしまうということは筆舌に尽くし難い状況だった。」と当時に思いをはせて、目を潤ませながら話してくださった。

その2003年から5年の年月を経て、私は彦根西高校に赴任するのであるが、その5年間から彦根西高校の新しい動きは始まっていたと考えている。進路変更者数だけで判断しているわけではないが、95名、46名、57名、47名、34名という年次別の数字の変化は、少なくとも彦根西高校が2003年の最も困難な時期に留まっていたのはいなかったことを明らかに示している。

私が聞き及んでいるその間の主な授業に関する動きとしては、1年生普通科入学生生の3クラス120名を4クラスに分割してクラス編成を行う。また、授業と授業の間の休み時間には、各階（彦根西高校のホームルーム棟は2階、3階、4階）に監督の教員を配置して、チャイムとともに教室に入り授業を受けるよう指導するという取り組みである。いずれも配置教員が増えるわけではなく、授業時間数や監督の時間数が増える取り組みであるが、教員の共通理解のうえで始められたと聞く。また「基礎学力の充実と確かな学力の育成」が急務であるとの認識のもと、2006年度から3年間、文科省の指定を受け、学力向上拠点形成事業（確かな学力

育成のための実践研究事業）にも取り組むことになったと聞いている。しかし、生徒が劇的に変化したわけではなく、依然成り立たない授業があったり、体育館での全校集会も成立しない状況は続いていたようである。ただ先生方は、生徒の小さな変化に気づいておられたと知っている。

二 2008年校長として赴任

赴任して最初の職員会議が感動であった。始業式について「体育館で実施し、担任は前に並んで、副担任は生徒の中に入って整列を指導しましょう。」という提案がなされたのであった。2007年度の3学期終業式も生徒は各ホームルーム教室に待機し、放送を流して実施されていた。体育館では寝そべる生徒が多数で、四角い状態に整列できない状況のようであった。

先生方が動いた！体育館でアザラシのように寝そべる生徒。後ろの壁際にたむろする生徒。なす術もなく立ち尽くしていた先生がついに動いた。赴任早々の職員会議であるから管理職の意向でも指示でもない。2008年4月8日始業式、先生方に勇気をもらい、私語で騒々しい中ではあったが私はあいさつで校歌を歌った。生徒指導については、7月の体育祭の入場行進で校長が指揮台で生徒の行進を見届けるのであるが、20分経っても30分経っても一向に生徒が歩いてこない。髪の毛の染色違反で教師と生徒の押し問答が続いていたのであった。結局、教員側の説明に納得して、違反の生徒は帰って直してから参加するということでおさまりがついた。なんと45分間指揮台の上で待ち続けたが、しかし、先生が動いた！生徒が聞き入れた！ことを思えば、短い45分間であった。

授業については、当時滋賀県では新しい人事評価制度の試行が教育委員会の指導で進められていた。校長は先生方の授業参観を義務付けられていた。そんな状況であったので授業の様子をうかがい知ることが容易であ

った。授業が始まり先生が教壇に立つと、教員と生徒が対峙して、中には険悪な対立の雰囲気を感じる授業もあった。また、先生が教壇に立つても、まったく休み時間と同じ時間が過ぎていく授業も見られた。当時の彦根西高校の授業を表すには、もちろん例外もあるが、概ね始まる前に5人、5分経つと10人、授業半ばには半数が机に伏せるという表現があたっていると思う。

赴任後、生徒指導と授業を見て私が感じたことは先生方に「2003年のどん底へ戻ることは絶対いやという危機感、それと、うちの生徒も先生の言うことをきいてくれるぞという希望」が同居しているということであった。

三 2008年6月こんなことで学校が変わるなり

何をメインに生徒に迫っていくのか、学校の将来像はどうか。あるいは、進学で頑張るのか、部活で頑張るのか。課題を抱える高校や、特色のない普通科の高校では常に話題となる。私も赴任までに6校の普通科高校を経験してきたが、学校が一枚岩となって1つの方向に進んでいったという経験はなかった。議論までは進むが、いざ実行というところまでは至難の業であった。

彦根西高校でもやはり同様の議論があった。生徒指導を工夫して迫っていくという選択も確かにあったと思うが、2008年当時の茶谷不二雄教頭が私に勧めたのは、広島県立安西高校の公開授業研究会への参加であった。「学びの共同体」による学校改革で劇的な変貌を遂げた学校と聞いた。公開授業研究会や学びの共同体という言葉も私は初めてであった。しかし、生徒指導を軸に学校を変えることの困難さは十分経験していたし、なにより授業で生徒が変わったということが新鮮であった。生徒指導は先生によってばらつきが生じる。しかし、授業は全員の先生が必ず取り組まなければならないことであるということも意識の中にはあった。

6月27日大矢教諭(国語) 夏原教諭(数学) 藤教諭(英語) と私の4名で安西高校の公開授業と授業研究会に参加した。佐藤学先生を見るのも初めてであった。コの字型の机配置と4人グループでの授業。机と椅子の脚に取りつけられた硬式テニスボールが鮮烈であった。こんなことで学校が変わるのかというのが正直な印象であった。でも、これならうちでもできそう、これでうちも変わるならという気持ちも強かった。帰りの電車で夏原教諭が「僕、やってみようかな。」と言ったとき、「じゃあ、硬式テニスボールそろえるよ。」と言ったことを覚えている。帰校後、今回の公開授業研究会と学びの共同体に関する報告を、職員研修会という形で夏原教諭にやってみようとした。

四 聞いてみよう 見てみよう まねてみよう

安西高校から帰るとすぐ、茶谷教頭に「『学びの共同体』による授業改革・学校改革」で進んでいこうと思いと相談をした。教頭は二つ返事であった。そうなると校長としてやらなければならないことは、県教育委員会との協議であった。特色ある学校づくりとして彦根西高校は「『学びの共同体』による授業改革・学校改革」推進校であることを広く社会にアピールしていくことの了解であった。県教育委員会ではできる限り応援をさせてもらうとのことであった。そのあとは、学校構想委員会、運営委員会を経て7月9日に職員会議で教員に「『学びの共同体』による授業改革・学校改革」で進んでいくことを伝えた。

教員に大きな反対はなかったものの、「学びの共同体」とは何ぞやという疑問や、未知への不安、既存への執着が大きかった。それも当然のことだ。「学びの共同体」に対する学習はほとんど何もなされないままの船出であった。ただ、それでもなんとか歩み出せたのは「2003年のどん底へ戻ることは絶対いやという危機感」とうちの生徒も先生の言うことを聞いてくれるぞという一筋の希望」があったからと確信している。それに

後押しされて、動いてみなければ、動いてみたらひよつとしてという気持ちが強かったに違いない。安西高校訪問からたった2週間での出来事であった。今思っても、準備不足のうえにずいぶん強引で怖いもの知らずであるが、「危機感と希望」がそれらを越えさせてくれたと思っている。

「学びの共同体」とは何ぞやという疑問や、未知への不安を解消する取り組みとして次の3つを掲げて提案もした。「聞いてみよう」「見てみよう」「まねてみよう」の3つである。「聞いてみよう」では、10月に和井田節子先生を招いて「学びの共同体」校内学習会の開催。「見てみよう」では今年度中には全員「学びの共同体」実践校視察。「まねてみよう」では11月に草川剛人先生を講師に、夏原教諭のコの字型と4人グループでの公開授業と校内授業研究会の実施である。2009年度本格実施に向け校内での共通理解に努めた。ちなみに「学びの共同体」実践校視察では教諭35名中31名が訪問した。

五 2009年本格実施

年が明け1月16日に職員会議で来年度の「学びの共同体」本格実施を決定し、2月3日に東京大学大学院に佐藤学先生を訪ねた。最初に本校の「学びの共同体」本格実施についての経緯や学校の概要について説明した。現在26名の教員が実践校を訪問していることを報告すると、即座に「それじゃあすぐにやってみよう。」とのことで嬉しさとともに「本当に？」という驚きも感じた。その後、実施についての本校の具体的な考えを述べ、アドバイスをいただいた。新1年生から学年進行でという思いであったが、一気に始めることがよい。やっている先生とやっていない先生、変わっていく生徒と変わっていない生徒を3年間（実質2年間）も学校が併せ持つ苦勞は大変であるとのこと心配いただいた。授業研究会も6回程度と考えていたが、参観だけを6回、研究会つきを6回というふうに工夫をして、年に1回はみんなが授業を見てもらうようにとご助言いただいた。

こうして彦根西高校での「学びの共同体」は動き始めた。

校内の体制として「学びの共同体」に関するすべての提案は校長、教頭と選挙で選ばれた4名の教諭からなる学校構想委員会で決定することとした。それと年2回の公開授業研究会（6月と11月に実施、講師は佐藤学先生と草川剛人先生）は学校構想委員に教務課主任、進路課主任、各学年主任を加えた「学びの共同体」担当者会議で進めていくこととした。各学校に設けられている将来構想委員会なるものを推進母体とすることがいのように思われる。

校内授業研究会は公開授業研究会との差をはっきりとさせる意味で、授業検討会と名づけ、機能性を重視し各学年をA、B2グループの計6グループ（各グループ6名程度）の少人数で実施した。回数は各グループ学期に1回（3年生は3学期はなし）のべ16回とした。

朝のSHR（シフトワーク）からコの字、授業もコの字と4人グループということで、依然として先生方には、今よりも騒がしくなって收拾がつかなくなるのではとの不安が大きかった。確かに仲間の顔が見えるコの字、仲間が隣にいる4人グループということで、リラックスしすぎて私語をする場面も授業によっては相変わらず見られた。しかし、今までの講義形式で感じていた教壇とフロアー、教員と生徒との敵対的な対峙関係が一掃されていると私には感じられた。そして、その変化は当事者である先生方が一番敏感に感じておられた。「あのクラスはやかましくてどうしようもない。」というボヤキが「どうしたら私語をなくせるかなあ。」という会話へと変わっていった。生徒の硬かった表情は穏やかなものに変化し、机に伏す生徒も目に見えて減ってきていた。教員が生徒の授業での姿を冷静に受け容れ、学びの授業をどうつくりあげていくかを考えることができる環境へと変化していった。

また、「授業崩壊は学校の責任」と常に公言していたこともあり、気楽に校内授業検討会で授業公開しても

らえるようになっていった。1年目の2009年度はあつという間に過ぎていき、何か確実に変化しているという手ごたえで学校も私も満たされていた。2年目、2010年度になると、コの字型の机配置と4人グループでの授業という形だけの「学びの共同体」では進めなくなってきた。ちょうど、その年度から授業検討会は各学年に専属の講師をお願いし、和井田節子先生、倉知雪春先生、守屋淳先生に年1回各学年の授業検討会に出席いただくことを計画していた。年2回の公開授業研究会を加えると、計5名の先生に現状を見ていただき、行き詰まりの原因や今後の課題をご指摘いただけただけなこととはとても大きな助けとなった。

なんととっても最大の行き詰まりは、いくつかのクラスで私語が収まらず、騒がしい授業が依然として続いていることであった。特に騒がしいクラスの授業を重点的に校内授業検討会で公開してもらい、その生徒たちをどうやって学びの場へ引き入れていくかを全体の課題として話し合うことにした。

私語以外ではジャンプの課題設定の難しさも話題になった。学校の状況をよく知っていたらだいている講師の先生方と一緒に、行き詰まりの出口を模索する道へと進んでいった。そんな2年目であった。

また、ベテランの先生の中には長年かけて築いてこられた授業スタイルをなかなか崩せない例もあった。あるとき、年上の先生から「校長先生、僕は『学びの共同体』の授業スタイルは勘弁してね。」と話してもらったことがあった。「先生は先生のスタイルで生徒のことをよろしく頼みます。」とお願ひした。

すべての先生方の中に「危機感と希望」が内在し、1年間彦根西高校を経験した茶谷教頭と、長年「学びの共同体」を研究していた夏原教諭がいてくれた。そこに私が赴任をしていったというだけで、動くべくして動き始めた改革である。生徒は穏やかに微笑み、学び合う関係も生まれてきた。2012年3月、終業式では生徒課主任の八木教諭がマイクなしで春休みの注意を行った。画期的であった。進路変更者も19名（内原級留置者6名）、生徒の学びたい意欲を大切にす彦根西高校へと確実に変貌している。

（元校長・樺 敏）

3

ビジョンの共有からダイナミックな学校改革へ

〈広島県立安西高等学校〉

一 学びに向かう姿勢が変わった

「何や、そういうことかあ。そこがわからなかったけえ。」数学の授業中、生徒の声が響いた。担当教諭が一通り説明した後、4人グループで問題演習をしていたときだった。数学が苦手な男子生徒が机に伏してしまいうようになったとき、隣の女子生徒が彼を引き起こし小声で説明し始めた。男子生徒は最初のうち面倒くさそうにしていたが、少しずつ体を起こしていった。そして3分ほど経ったときに先ほどの声が発せられたのだ。それから彼は一人で問題を解き始めた。数年経た今も鮮明にその光景を思い出す。「協同的な学び」を本格的に開始した2007年の秋だった。自らの熟考によるにせよ他者の助けを得るにせよ、「自分でわかった」「腑に落ちた」ときの感覚や感動が、人を主体的で深い学びに誘う原動力となる。

二 学校を活気のある場にするために

安西高校は、1979年に創立された広島市内北部にある男女共学の全日制普通科高校だ。開校当初は学校全体に活気があり部活動も盛んだったが、子どもの数が減るようになると次第に活気を失い、生徒指導上の問題が頻発して中途退学者数も増えた。しかし、私が赴任した2006年には、それまでの校長・教職員・保護

者等が一丸となって懸命に取り組んだ結果として問題行動や中途退学者も大幅に減少し、学校は落ち着きを取り戻し始めていた。とはいえ、まだ中途退学者は多かったし、表情を強ばらせ、荒んだ雰囲気を漂わせる生徒も少なくなかった。そして放課後になると一目散に下校していく。残念な光景だった。これまでの取り組みの成果を発展的に継承し、彼らがもつと長く居たいと思える学校にしたいと思った。教員も生徒指導や外部対応に時間を奪われ神経をすり減らし表情は険しかった。教員が自分の職場でやりがいを感じ、澁刺はっさとした表情で過ごせる状況にしなければならぬと思った。生徒が心底この学校に來たいと願って入学し、充実した高校生を送ることができるようにするにはどうしたらいいのか、学校を求心力が強く活気のある場に改善するにはどうすべきなのか、教職員や地域の方々などから幅広く意見を訊き、検討を重ね、今後の取り組みについて道筋を描いた。その柱の1つが授業を変えることだった。

三 ビジョンの共有に向けて

着任後間もなく授業観察をして回ると、教室は静かで授業規律はほぼ確立しているようだった。ただ、生徒が意欲的に学んでいるという雰囲気ではなかった。教員の一方的な講義についていけず、つい机に伏してしまふ生徒も少なからずいた。教職員に配布したSWOTシートでは、安西高校の「弱み」の欄には、ほとんどの教員が「生徒の学力が低い」「学習意欲が低い」と書いていた。「おもしろい授業をと、頑張っているんですかね。振り向くと生徒がみんな寝ているということもあるんです。」と話す教員もいた。生徒のせいばかりにはできない、授業のあり方を変えないことには問題は解決しないと思った。これまでの授業では、授業の大半を教員の講義が占めていて、教員の構想通りに授業が進んでも、生徒の集中力が続かなかつたり、生じた疑問を解消できないまま取り残されるといった状況が生じがちだった。生徒が前に向いているので、教員は生徒を掌

握していると思っても、教員の発問に応じるとき以外にほとんど声を発する機会がなく、生徒は孤独でひたすら板書に忠実なノートづくりを進めているだけということもあつた。そして寝てしまう者も生じていた。これは学力は伸びない。教師の話を聞くばかりでなく、生徒が自分に問いかけたり、アウトプットする機会がもつとあるべきだと思つた。何より教室に居場所がなければならぬ。そのような方向で授業改革ができないものか……。これは、前々から思っていたことだ。それには以前、近くの広島市立祇園東中学校で見学した「学びの共同体」の取り組みがヒントになると考えた。そして、これを参考にすることで授業を変えることができるのではないかと思つた。

しかし、「授業を変える」と言葉で言うのは簡単だが、現実には容易ではなかった。ベンチマーキングしようにも国内の高校に事例を見つけることは難しかった。教員の中には、「やつと静かになつたのに、再び收拾がつかなくなるのではないか。」と不安を訴える者や、「生徒の現状から、そもそも無理だ。」と言う者もいた。しかし、できない理由を挙げて「仕方ない。」と言っていたのでは前進はない。「どうしたらできるか。」を考へるよう求めた。机や椅子の移動の際に音が出ると指摘があつたので、使い古しのテニスボールを入手し、すべての机と椅子の脚に取りつけた。教室の床に置かれた生徒の荷物邪魔だと聞けばロッカーを探してきて教室に設置した。教員の一人が「協同的な学び」と言われても、イメージが湧かない。」と言ってきた。ならば「百聞は一見に如かず」と、ある日の午後全員祇園東中学校の校内授業研究会に参加してもらつた。後日、一人の教員が取材に応じて「個人でやっていたのなら、ちょっとでも壁を感じると安易に元に戻ってしまったのではないか。でも、全体の計画として決まっているから戻れない。しかも度々『公開授業研究会』があると、なおさら戻りようがない。」と話していたのを思い出す。

なんとか各教科で取り組みが始まつた。実際に4人グループにしてみると、何もしないで寝るといった生徒は

※SWOTシート…アルバート・ハンフリーによって考案されたSWOT分析に使用するワークシートのこと。組織や個人を「強み」「弱み」「外部的機会」「外部的脅威」の視点から分析する。

激減した。作業を指示するとそれなりに活動した。アンケートでは、「グループによる学習の方が勉強する気持ちが高まる」という項目に、約7割の生徒が肯定的回答をした。生徒の反応が先行し、教員の不安を少しずつ解消していく感じだった。本格導入が迫った2007年1月、初めて公開授業研究会を実施した。佐藤学先生に無理をお願いして来ていただいた。中心授業、研究協議会に続いて佐藤先生の助言をいただいた。直接話を聴いて、皆が心を大きく揺さぶられたようだった。全国からたくさんの人たちが来てくれたことにも勇気づけられた。

四 授業研究会の深まり

2007年4月、1年生から学年進行でグループでの「学び合い」を組み入れた授業をスタートさせた。「生徒がグループ内で話し合う言葉聞いて、あらためて気づかされることがある。『待って、今はこういうことをやりよるの?』『こういうことをいいのかなあ?』』というのを聞くと、『(生徒は) こう言わないと伝わらないのか』と勉強になる。」という教員の声を聞いた。皆で取り組みを進め考え方を共有するために月に一度は校内授業研究会を行うようにした。高等学校には教科の壁があるといわれるが、「生徒の学び」に焦点を当てたことで教科を越えて研究会ができるようになった。「他の教科の授業を見るのはとても参考になる。自分の教科だと方法論になりがちだが、他の教科だと自分のときとは違う生徒の姿が見え、ヒントになる。」と感想を述べた教員がいた。

2008年4月、取り組みは2年目に入った。1、2年生で、コの字型の机の配置と少人数グループによる授業がスタンダードとなった。授業中の生徒の表情は一樣に柔らかく明るくなっていった。もはやテスト返しの際に得点が記されている部分を他の生徒に見られないよう隠したり、折ったりする生徒はほとんどいなくなつた。

授業研究会も回数を追うに従って深まってきた。最初15分ぐらい授業のビデオを流して、それから協議に入る工夫もした。振り返りのためであり、直接授業を見られなかった教員のためでもある。次第に授業研究会の質が変わった。生徒一人ひとりを見る目が深くなった。最初の頃は当たり障りのない意見が多かったが、2年目の半ばを過ぎた頃から生徒の学びに焦点が定まるようになってきた。グループで支えられていた男子、わからないことをまわりにどんどん質問してグループを引っ張っていた女子、生徒がぐっと集中した瞬間、それらのことについて名前を挙げて生徒の姿が語られるようになった。生徒が見えるようになったことで、本当の意味で生徒の視点に立った授業づくりが意識されるようになったと思う。

五 学び合いの成果

「ちょっとこれを見てくれませんか。」2008年秋、教務主任が、数年前から県内で行われている「共通学力テスト」の結果を持ってきた。2007年度入学生2年生のデータが3教科とも1年時のそれを上回ったというのだ。そんなことはしばらくないことだった。詳細にデータを調べてみると、1年時に比べて「無答」が大幅に減っていることが判った。1年時には、解こうとすらしなかったのに、その後の1年間で、とにかくできるところまでは解いてみようとするようになった。そういう生徒が増えていた。成績上位層についても若干ではあるが向上が見られた。授業に「学び合い」の機会を取り入れた成果ではないかと思つた。授業の中に実験などの体験やアウトプットの機会を設けると、生徒の理解が正確になり定着の度合いも高まると思つたが、最近、「他者に教える作業を伴って学ぶと、単に講義を聴いただけの場合に比べ格段に知識の定着度が高かった」という報告について聞くことがあった。直接原典に当たったわけではないが、全く同感である。

六 ビジョンを共有して進める学校改革

「最初見せられたときは、やることが盛りだくさんで大変だなと思いました。でも、これ以上増えることはないということだったし、先に全体像を把握できたのでやりやすかったですね。」「最初はねえ、ホンマかなあと思っただんですよ。でも校長が、もつと良くなる、もつと良くなる、と念仏のように繰り返すし、まあやってみるかということをやっていたら、本当に全く別の学校みたいになったんですよ。」「2008年に「安西高校進化論」（学校経営改革推進基本計画）の成果について、雑誌の取材を受けたときの教員の声である。「安西高校進化論」（以下「進化論」というのは、2006年5月に学校活性化に向けて書いた「筋書き」である。学校としての魅力を高めるために必要な取り組みを皆に見える形で示しておくのと円滑に進みやすくなるだろうと考えて策定した。皆の当事者意識が高まるようにと思い、できるだけ多くの教職員の意見を反映させた。そして、「宣言」してしまうことで私自身を後戻りできなくさせるという狙いもあったかもしれない。教職員にも、皆の意見を反映して策定した計画だからゴールにたどり着くために「できない理由」を挙げるのではなく「どうしたらできるか」を考えてほしいと求めた。

私が学校の姿を想うとき、アメリカの心理学者マズローの「欲求段階説」が頭に浮かぶ。この説には異論もあるようだが、自分としては1つのモデルと捉えている。学校は、何より安全で安心な場でなければならぬ。その上で、所属の欲求や節度ある承認の欲求が満たされるなら、そこは居心地よく活気のある場となる。人は、他者から存在を認められ必要とされることで生きるエネルギーが倍増する。前向きになれる。だから、授業や部活動・学校行事などの充実と改善により学校をそういう場にしていきたいと思った。そうすることで、生徒一人ひとりが勇気を持って、なるべき自分になることをめざせるようになればよいと思った。

「進化論」のゴールは「弟、妹、わが子を行かせたいと願う学校」と「教職員がやりがいを感じられる学校」とした。来たいと思われ、来た甲斐があったと思われたい学校にしたいと考えた。

「進化論」の内容は、概ね次の通りだ。第一に、教育課程を普通科として最低限必要な内容に変えた。次に、教科書を原則A判に変更した。一部でB判の教科書が採用されていたが、厚みがなく平易な表現で綴られた教科書は、生徒の深い学習を促すにはおよそ不十分であったし、この教科書が生徒たちの自己評価を下げさせることを懸念した。

また、生徒の意識を変えようと制服も全面的に改定した。学校が変わったことを周囲に伝える意図もあった。新しい制服のデザインコンセプトは「凜」とした。

学校行事の充実にも注力した。多くの学校で、学校五日制となつて以降学校行事は精選される傾向にあった。しかし、学校行事は単調な日々を輝きをもたらす。せめて1か月に1回「特別な日」を置きたいと考えた。その日をめざして皆で準備したり練習したりすれば所属感が強まろう。新たに春のクラスづくり遠足、秋の鍛錬登山、冬の百人一首大会等を企画した。1年遅れて6月の文化祭に合唱祭を組み入れた。この合唱祭では、生徒たちは心を1つにして練習に励み、本番当日は体育館の屋根を叩く激しい雨音にも負けず、すべてのクラスが素晴らしい歌声を響かせた。以前は文化祭というと校内の隅っこで所在なげにたむろするグループが目についたが、2008年度あたりからは、協力して自分たちで準備を進める姿や、クラスのテントで一日中クラスの仲間と過ごす姿が見られるようになった。

部活動活性化も重要な柱だった。部活動を通じて、学校の文化を「凜」としたものにしたいと考えていた。何としても部活動のよさを生徒たちに経験させたいと思い、他県の例を参考にして、入学後1年間は全員をいづれかの部に所属させる「部活動全員登録制」を導入した。「部活動を頑張りたい生徒を求める」ことを学校

のアドミッション・ポリシーの一項目として記し、ホームページに掲げた。野球部の硬式化にも取り組んだ。年度末までの限られた期間でバックネットなどの安全施設と、指導者と、部員となるべき受験生を確保するという、実に際どい作業を進めなければならなかった。それでも関係者の理解と協力を得て、なんとか硬式野球部を立ち上げることができた。ここでもあらかじめ関係者に「進化論」の概要を伝えておいたことが奏功した。硬式野球部の立ち上げと併行して他の部の活性化にも尽力した。2007年度から、各部の部員数は急増し活動は活発になった。彼らを中心に、朝から爽やかな挨拶が飛び交うようになり、放課後や土日の校内は格段に賑やかになった。さらに、広報活動も積極的に行った。安西高校が何を約束し、何で笑うのか。学校を変える意気込みや目指す姿を伝えるために、中学校や学習塾を頻繁に訪ねた。教員にもそれぞれ担当中学校を割り当て、定期的に訪問してもらった。夏のオープンスクールや秋の入試説明会等へ参加を促し、中学生に自分の目で安西高校の今を確認してもらうことに努めた。ホームページも全面的に改め、たびたび更新した。マーケティング等に係る理論のうち、使えるものは学校経営にも応用すべしと考えていた。ありがたいことに2007年度入学者選抜では予想を超える出願があった。合格発表の日、自分の番号を見つけ抱き合って喜ぶ合格者の姿を見て「そういうえば、前任校ではこれが当たり前だった。」と言う教員の声が印象的だった。「部活動に力を入れていける学校だから」「オープンスクールに来て、学校の様子がよくわかったから」と、自らの意志で選んできた生徒の声を聞くことができた。この他に、弱みだった施設設備の整備等も進めた。細かいところでは、面談回数を増やすなど教員が生徒に密着した指導を展開できるよう態勢を整えた。また、修学旅行はキャリア教育の一環として機能するような内容にして行き先も変えた。このように、1つひとつの取り組みをできるだけ丁寧に見つめ直し、その価値を高めるよう心がけた。ビジョンを掲げ計画に沿って粛々と取り組みを進めた結果、生徒の姿が変わり学校が変わって地域の評価も変わった。理念を理解し一緒に取り組んだ教頭や教職員

のおかげだ。生徒も新しい歴史を作る意気込みで実によく頑張った。しかし、安泰の約束はありえない。「停滞は後退」とも言う。どの高校にも言えることだが、入学した生徒や保護者の期待を超える満足をもたらすべく、その営みの内容と質の改善を進めなければならない。

七 学びの質を高めるために

私はその後、異動となった。そして勤務したそれぞれの高校で、生徒が能動的な学びに向かうよう授業改善の取り組みを進めたが、とりわけ「協同的な学び」に生徒は歓迎的な反応を示した。今後は「ICT」を有効活用するなどして、学びの密度を高める工夫を進めたい。それにしても心強いのは、近年、高校でも組織的に「協同的な学び」を導入しようとする動きが活発化してきたことだ。一方で躊躇する姿も見られる。理論研究は大切だが、あまり厳しく考え過ぎず基本原理を押さえた上で一歩を踏み出すのもありではないか。大切な理念であって手法ではなからう。生徒が高い意欲を持つて主体的に学ぶよう導きたい。「協同性」や「双方向性」を視野に置いた学校づくり・授業づくりを進めることは時代の要請だと考える。質の高い学びを実現するための創造的実践の輪がますます広がることを期待したい。

(元校長・才木裕久)

4

「学びの共同体」でよみがえる心地よい学校空間

（静岡県立沼津城北高等学校・静岡県立川根高等学校）

一 学校が再生する日

4月。新入生を迎え、先生方も入れ変わり、学校組織も再生されるときである。クラス担任であれば、生徒の登校前の新しい教室を見に行くように、私も期待を胸に校内を歩いていた。どのクラスの机もコの字型に並べられて、生徒たちの登校を待つ静寂としたその空間は、清々しさとともに緊張感も漲もたっていた。

2009年4月9日、全学年の授業が一齐に始まる早朝のことである。この年、静岡県立沼津城北高等学校での「学びの共同体」が、全校実施された。

私は、静岡県立川根高等学校でも、「学びの共同体」を全校で取り組んでいる。この2つの高校での実践経験を振り返って、全校実施のプロセスとその成果について考えてみたいと思う。

❖ 沼津城北高校での全校実施までのプロセス

沼津城北高校は、全日制普通科で1学年5クラス規模、教員数は約40名。県東部地区の約二十万人都市に位置する地区の三番手とされる学校である。学力の目安とされる国公立大合格者数は、例年数人未満。

この地区には私立高校も多くあり、公立高校にとっては生徒募集の激戦区であったが、地域からは特色を感じないとの印象も持たれていた。ちなみに普通科高校の特色といえば、ほとんどが国公立大、難関私大の合格

者数や部活動の全国大会での戦績、特別進学クラスの設置、平日や土曜日の進学補講体制の充実といったものが宣伝される。しかし、「協同的学び」など、授業研究を特色に打ち出している高校は、ほとんどみられない。

そういうなかで、県の研修所の勤務経験がある鈴木良平校長、指導主事からの新任に乗松修司総括教頭、そして授業研究の実践を試みてきた私と、それぞれに「授業」の大切さを感じている管理職が集まった。

例えば、当時始まった教職員の人事評価では、喜んですべての先生の授業を50分間、3人で見せていただいたし、参観後の感想も三者三様に伝えていた。そしてこれを機に日常の授業風景を見始めた。これだけでも授業を大切にされた学校づくりの一步になるだろう。

さて、そのなかで校内の喧噪よりも生徒の不可思議な行動に違和感を持った。授業中はうたた寝や私語などで集中しにくい状況が少なからず見られるのに、定期試験では驚くほどの静寂さを見せるといったアンバランスさである。それは、覚えたことをテストで吐き出す、赤点を逃れるための行動様式に他ならなかった。少なからず試験問題もそれに呼応するものとなっていたが、まさに知識偏重型の象徴的风景だと感じた。この違和感を払拭することができれば、また一つ、学校の再生につながるはずだと思われた。

赴任2年目、校長からコピーを渡された。広島県立安西高等学校の取り組み（『総合教育技術』2008年5月号）であった。校長は、「学びの共同体」を実践している中学校の先生方との交流があり、その大きな可能性を感じ取ったという。私は以前から佐藤学先生の著書も手にしていたが、当時は義務教育での実践だと看過していた。5月、校長が教務主任と富士市立岳陽中学校を訪問、私も6月19日の公開授業に参加し、他の実践中学校への訪問や情報収集をしながら、実施への確信を強めていった。12月には安西高校の公開授業研究会にも参加し、学校が再生されるということを実感させてもらった。その間に校長と佐藤学先生の研究室へ伺い、来校の承諾をいただいた。

経緯の詳細（「VIEW21」ベネッセ2009年4月号を参照・web版あり）は割愛するが、準備のプロセスを通観してみる。まず本務教員のほとんどの先生方に実践校を訪問してもらい、その授業を「見聞」してもらった。同時に授業研究会で行われる佐藤学先生の講演で、「学びの共同体」の哲学、ビジョンを伺い、その実践の「理由」を論理的に知ってもらった。そして、高校への支援をしている和井田節子先生、草川剛人先生に生徒対象の模擬授業や先生対象の体験授業で、一斉授業との違いを「体感」してもらった。あわせて実践への不安や疑問を、研修会や個別の懇談のなかで「解決」してもらった段階を設定した。

実践に当たっては、まず外部への公開も目的とした授業研究会（公開校内研修会）を開催する方向で準備した。提案授業の候補者は、3年間クラス単位での授業があり、単位数の大きい教科の低学年の先生にお願いすることにした。一部の学年での少人数の選択科目よりも影響力が大きいからである。さらにその先生自身も3年間、自分の学年で実践を積み重ね、成長を実感できるからだ。具体的には、英語科で進めることにした。中学校では英語の「協同的学び」が難しいとの声も聞き、中学校へのアピールになると考えたからである。

その年の10月15日の職員会議で、次年度からの全校実施を校長が提案した。そして12月18日、県内では初めて高校の教室に佐藤学先生が立ち、第一回公開校内研修会が開催された。

❖ 高校教員としての壁

先生方は、新しいことに対する不安や懐疑心を少なからず持っている。義務教育にくらべてトップダウン的な指示も反映しにくい。分掌と教科は、それぞれの教員にまかせるといった学校文化が指示を緩和してしまうからだろう。「協同的学び」は、高校での実践例が少なく、教科を通してのイメージが持てないこと。慣れ親しんだ一斉授業を否定されている感覚に陥ること。何より「協同的な学び」では、「教員は教えない」といった誤解も多く持たれた。適切に教えるのであるが、チョーク&トークで教育され、それが再生産されてきたの

であるから、生徒が主体的になって学び合うというイメージを持ちにくいのは無理もないのだろう。

しかしながら、どの先生方も生徒とのより良い関係で授業を進め、その心地好さを職員室に持ち帰りたいと思っている。いや、願っている。職員室に入るや否や「生徒が寝ていた」、「話を聞かない」と嘆息するのは、その裏返し心理である。「協同的学び」は、それを取り戻すことができる実践になると私は確信していた。

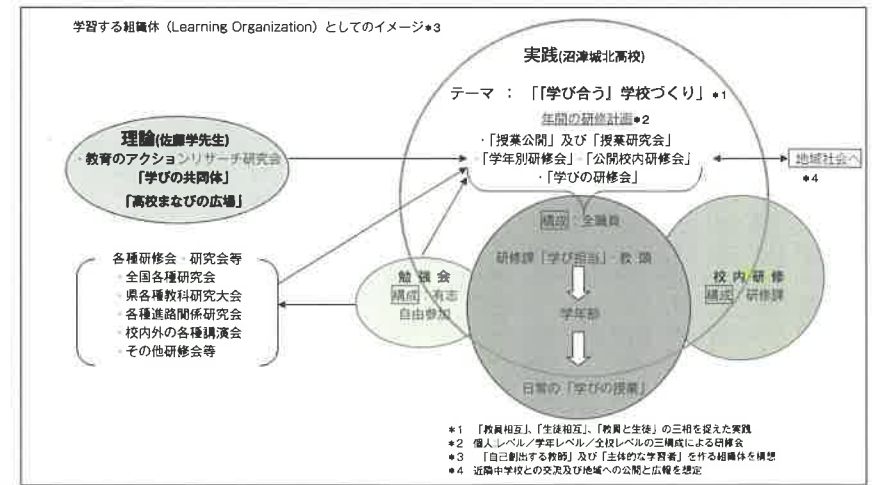
ちなみに高校の研究授業では、参観者全員が教室の後ろの椅子に座って教壇の授業者だけを目で追っていく。これは、授業に参加している生徒だけを相手に進む一斉授業と構図は同じである。だから、提案授業はもちろん、公的な研究授業でも一切座る椅子は用意しなかった。最初は参観者ともども授業者も困惑するが、生徒たちが4人グループになると意識が変化するように、先生方にもこんな仕掛けが必要だろうと考えた。

また、個人的には、授業では「協同的学び」、進学補講等では一斉授業といった2つの使い分けをしてもよいのではないかと考えている。なぜなら、高校では少なからず受験対策を迫られる時期もあり、進学体制に対する外部からの要請も依然根強い。そして何よりも両用の実践は、それぞれの利点を自ずと際立たせることもなるはずだからだ。さらに共通一次以降、暗黙的に形成されてしまった生徒たちの選択的解答法、正解主義的な思考を揺さぶるためにも、2つの使い分けは、効果的な手立てになるはずだと考えている。

さて、沼津城北高校では、教頭の私も授業を持っていたので、「協同的学び」を試みた。実践していくうちに、また、実践校を訪れたりするなかで忘れていた感覚をよみがえらせていた。

それは自分の教室のなかに育てたいと願っていた教室内の「しっとりとした雰囲気」、「ささやき、つぶやく生徒たちの仕草や表情」であった。決して活発ではないが、教室全体の内的鼓動、ダイナミズムを感じる心地よい空間である。これが「協同的学び」特有の教室空間、流れる時間だった。

図1 全校実施に向けての体制作りの構想



❖ 日常的な実践の理論化

公立高校では、人事異動によって学校は常に再生されていく反面、ノウハウが伝わらず取り組み自体が消えていくのも常である。そこでナレッジ・マネジメントといった学校経営も推奨されることになるが、外部の支援体制が確立すれば、継続の大きな推進力となる。数十年間も同一の大学教員が関わってきた事例もある。そのような視点から全校実施に向けての体制作りの構想(図1参照)を練った。

「学びの共同体」の実践は、一人ひとりの教員の専門性を高めながら、同僚性の構築を実現する。それは、「組織の枠組みのもとで構成メンバーは学習し、また、一方、構成メンバーの知識形成も組織の枠組みに影響を与えていく。そういうダイナミズムを生み出すシステム」としての学校づくりである。「学びの共同体」のスーパーバイザーは、これらを見事に実現してくれる支援体制である。

また、全国の「学びの共同体」の実践者や研究者が集まる宿泊での研究会が、夏と冬の年2回開催されている。高校部会では、高校のスーパーバイザーの運営で、高校の実践報告をもとに研究協議を行い、情報交換をしたり、お互いの実践と改革の成果を確

認し合ったりしている。これから実践を始めようと考えている先生方にとっても、実践のイメージづくりへの有効な場となっている。

❖ 共通理解の構築

全校実施が迫った年度末、先生方から共通理解のためのマニュアルがほしいとの要望があった。そこで、「学びの共同体」づくりに向けて「ファイルを全員に配布した。その表紙には次のように記した。「2009年度からの全校実施、そして『学びの授業』を始めるに当たって必要な資料を」としてあります。新しい取り組みですので、日々の実践から様々なことを私たち自身も学んでいくことになると思います。それが『学びの共同体』の本質だともいえますが、そのつどよりよい内容にしていくことで、本校としての確かな実践にしていきたいと考えています。」構成は以下のようなものである。①「学びの授業」を始めるに当たって(教員用) 図2参照、②「学びの共同体」の哲学(「命題・定義」)、③「学びの共同体」の紹介チラシ、④全校実施に向けての体制作りの構想(図1参照)、⑤「実施に当たっての共通理解」、⑥「コの字型」の配置図、⑦授業デザイン・記録(書き方)、⑧通信1、2号(通信の意義、授業研究会の持ち方)、⑨「混迷する現実と深刻な問いとの闘い」(佐藤学『ムックAREA』2003年6月)、⑩「高校における授業研究の課題」(同「カリキュラムの批評」)、⑪「高校まなびの広場 高校ネットワークの取り組み」(和井田節子『月刊国語教育』2008年12月号)。

⑤には、「学びの共同体」の全校実施にあたって基本部分での共通理解を持つことで、円滑な実践を進めるとともに、校内に自主的な『授業研究』による同僚性を築くことを図る。」との趣旨を記した。そして以下についての項目を示した。(1)机の配置。(2)生徒の教室内の私物について。(3)「学びの授業」を始めるときの生徒への説明について(図2参照)。(4)授業の公開(「授業公開」及び同僚性の構築に向けて。(5)申し合わせ事項。

なお、(5)は、以下のような内容である。①以上の申し合わせは、2009年4月1日より実施する。②実践過程で改定すべき点が生じた場合は、随時検討するが、とりまとめは「学び担当」(研修課内)と教頭が行う。

③年間の研修会は、個々の研修としての「授業公開」(一人1回としてのべ約40回)、学年単位での研修会としての「学年別研修会」(各学期の定期試験中に学年毎に3回実施、のべ8回)、学校全体としての「提案授業」及び「公開校内研修会」(1学期後半と2学期後半あるいは3学期に各1回、のべ2回)で構成する。④「学年別研修会」及び「公開校内研修会」の外部講師については、「学び担当」と教頭で派遣を依頼する。なお、「学年別研修会」の講師は、学年毎に1名ずつ招聘するのが好ましい。⑤新任者への研修は、「学び担当」と教頭が、4月当初の春休み中に行い、新任者への新学期以降の授業に備えることとする。なお、新任者の新学期当初からの実践が難しい場合は、積極的に授業参観を勧め、無理なく実践できるように「学び担当」と教頭が支援体制を整える。⑥非常勤講師等の協同学習の経験がない先生方に対しては、「コの字型」ではなく「一斉授業型」で、協同学習も取り入れなくてもよいこととする。④-2「公開校内研修会」は、(1)「公開授業」(当日日課の授業の公開)と(2)「中心授業」(継続的な授業の公開1コマ)、あるいは(3)「提案授業」(取り出し授業や私案等の提案を試みる授業の公開)、授業研究会及び講話で構成する。

いずれにしても新任の先生方への研修資料もかね、異動時にバトンのようにこのファイルが渡されていくことを願ったものである。また、管理職からの提案ではあるが、「学び担当」(研修課内)との協議のもとに全体的には、無理のない進め方をしたいとの配慮もしている。

なお、全校実施された2学期には、実践をさらに円滑に推進するための「学びの共同体」委員会(「学び」の委員会)が設置され、実施2年目からは、4月当初に新任者対象の研修会も設けられるなど、先生方の発案でシステムもより整っていった。また、職員室の空き机を「学びの机」として、参考図書コーナーを設け、先

図2 「学びの授業」を始めるにあたって (2009年度版)

「学びの共同体」の中心は、「協同的な学び」にあります。この「協同的な学び」は、日々の「学びの授業」から始まります。

「学びの授業」は、生徒の皆さんが、授業の中で自らが学んでいくこと、そしてクラスの友達と「学び合う」ことを大切にする授業の方法です。授業で学ぶのは、生徒の皆さんだからです。

教室の座席は、「コの字型」です。こうするとお互いに顔を見ながら学ぶことができます。先生との距離もぐっと近くなります。

先生が課題を出したら、皆さんは4人で「グループ型」になり、向かい合った机をきちんとつけて、課題に取り組みましょう。

ここでは、できる人が教えていくという活動ではなく、分からない人が、「ここは、どうすればいい?」「どうして、ここはそうなの?」と質問をしていい場面なのです。分からない人が教えてもらうという関係性を築く時間なのです。分からない人が訊いて理解するだけでなく、分かる人もいろいろな視点から教えることによって、さらに理解が深まり、確かな考え方にすることができるからです。

この授業を充実したものにするためには、やはり予習と復習が大切になります。分からないところを発見してくるにもなり、授業で分かったことを確かなものにすることができるからです。

そして、教科書、ノート、資料集、辞書などをきちんと持って来なくてはなりません。4人グループで「協同」して教科書を読んだり、資料集を使ったりしながら、難しい課題を解いていくからです。

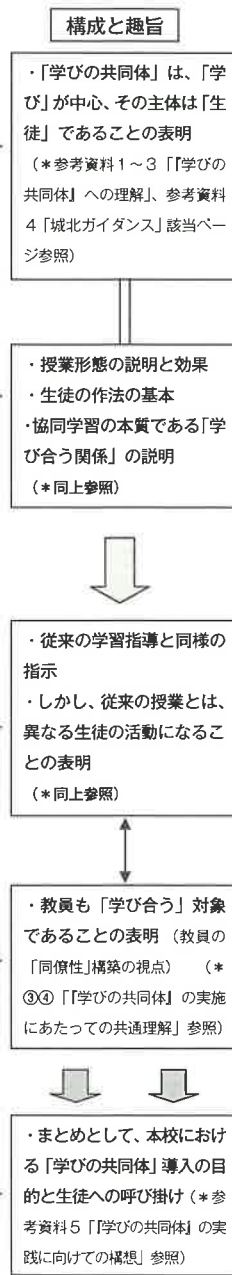
これまでの先生の話をもっと聞いて、黒板を写していた受け身の授業から、先生が出した課題を「探求」し、「表現」する能動的な授業に変わるのです。

私たち教員も、新しい取り組みのために準備をしてきました。そしてこれからも研修を続けていきます。

例えば、よりよい授業づくりのために授業を公開したり、授業をビデオに撮ったりして、皆さんの「学び」や「学びの置き」を、同僚の先生方と一緒に「授業研究」で振り返っていきます。生徒の皆さんのよりよい「学び」のために、私たちも学び合っていきます。

このように授業を中心にして生徒の皆さんと私たち教員が、1つになって「学び合う学校づくり」を目指すことで、学校が変わっていきます。皆さんの学力もより向上し、確かな進路実現に結びついていきます。そして、他者を尊重することや人間関係づくりにつながるコミュニケーションの力など、21世紀に生きる私たちに欠くことのできない大切な能力を身につけることにもなるのです。

それでは、一緒に「学びの授業」を始めることにしましょう。



生方の実践記録、録画DVD、他校の資料、ネット上で収拾した資料などもファイリングして視覚化できるように配置するなど、環境づくりにも工夫をした。

❖ 変化する生徒たち

第一回の公開校内研修での協議会の様子は、今でも鮮明によみがえらせることができる。全員で1つの授業を参観したこと。そして生徒の表れを中心にした一人ひとりの先生方の感想による授業研究会が進められたことなど。高校の従来の研究授業後の協議会からは、想像もできない内容であった。何よりも初めてであるにもかかわらず先生方がそれを実現してくれたのである。一斉授業を中心にした先生方でも、一人ひとりの生徒の様子を把握しているのである。ただ、それを表現する場が、方法が、用意されていなかったのだと感じた。

佐藤学先生からは、「学びの共同体」は先生方も幸せにすることや現場の先生方への温かいエールが贈られた。また、高校生は中学生とは違って順応性が高いので、学年進行ではなく全校実施にした方が効果はあるとの助言をもらい、押し隠されていた実施への不安が、一気に解き放たれたようだった。ちなみに全校実施後は、年配の先生方も率先して「協同的学び」を自らの授業の中で実践し、提案授業も引き受けるなど予想外の進展もみられた。キャリアのある教員ほど、「協同的学び」の可能性を直感視できるのである。

最も顕著な変化は、やはり生徒たちであった。個々の事例は枚挙にいとまはないが、提案授業を参観に来た中学校の校長先生が、中学校時代にはなかなか授業に集中できなかったという生徒が、グループの生徒と額を突き合わせて夢中に授業に取り組み姿を見て感心して帰ったり、教育実習生が、自分が在学していた当時の授業の様子とは全く違って、まるで別の学校のようにだと驚いたりしていることなどが、それを言い尽くしている。

なお、個人的には、学校の保証すべきものを大別すると、「学力」、「安全」、「人権」の3つではないかと考えている。様々な教育施策もこれに沿っている。学校によってこのバランスやベクトルは異なるが、「協同的

学び」は、この3つを保証する大きなファクターになると感じている。学校全体で取り組む「授業研究」も同様の効果をもっている。

学校経営や管理職の立場から言えば、独特の学校文化とされる「相互不干渉」は、様々なマイナス要因の温床になるとされるが、「協同的な学び」、「授業研究」といった取り組みによる教員同士の同僚性の構築で、学校全体の安全やコンプライアンスも保証することができるのではないかと考えている。

二 高校教育を取り巻く環境

現在、高校教育の見直しだが、中教審分科会の高等学校教育部会で進められている。その中心的な課題は、多様化の中の「共通性」で、コアといったコンセプトで審議は進んでいる。学力到達度テストの導入も示されたが、中教審の高大接続特別部会でも同様に高等学校の卒業時点での学力の質保証といった視点から、審議を進めている。さらに大学入試センターでは、「高大接続テスト」をはじめ、高校教育へのフィードバックが可能な教科科目型、大学での就学支援となる適性試験型タイプの試験等々の試作も進むなど、動きが活発である。

21世紀は、ポスト産業主義社会の知識基盤型社会とされる。確かに今回の学習指導要領でもこの対応として、教科を横断する言語力の育成やジェネリックスキルが示された。しかし、より高度な知識社会、多文化共生社会、リスク・格差社会、そして市民社会の成熟化した社会への対応（「新たなカリキュラムの形成」2010年9月11日）は、示されていないという。また、OECDの「生徒の学習到達度調査（PISA）」による結果報告やDeSeCoプロジェクトでは、21世紀に求められる児童生徒の学力観のモデルやコンピテンシーとして異質な集団で交流する力なども指摘されている。「学びの共同体」は、これらの力を先験的に身につさせる装置となっている。隠れたカリキュラムの領域にも近いが、生徒たちの変化という確かな手応えを感じさ

せてくれるからだ。

なお、逆説的な例示だが、教育産業と企業とが協同して高校生の「学び」をコーディネートしたり、大学での「学び直し」も進められたりしている。PISA15での協同型問題解決の出題予定、東京大学の9月入学の検討や推薦入学の導入なども、「新たな学び」の実現が学校現場に求められていることと軌を一にしている。

学校での中心的な教育活動は、日々行われる授業に他ならない。そして、そこにしか「学び」の改善や質を高める契機は存在しない。そして授業での事実、あるいは具体的な子どもたちの姿に特化した授業研究に、そのヒントが隠されているはずである。いずれにしても、高校だけが、中学校での学力不足に不満を抱き、大学受験があるからといった被害者の意識で、いつまでも変わらずにいる訳にはいかないだろう。このような時機に、21世紀型の「新たな学び」として注目される「協同的学び」の実践を、高校自身の内発的な取り組みとして発信できる意義は大きい。

❖ 「協同的学び」の領域の拡大

現在、文科省や総務省で推進している授業現場のICT化、先述した高等学校教育部会で推奨されている授業の改善も対話型、協同型を取り入れた授業、即ち「協同的学び」の領域となっている。「インクルーシブ教育」での多様な学びの場合（2012年7月23日中教審）としても「共同学習」の意義が示されている。

また、義務教育では、学習指導要領の改訂によりNIEが推奨されているが、この授業展開には、「協同的学び」が威力を発揮するはずだ。このように協同を体験した生徒が、すぐ高校に入学して来る。高校教育は、外発的な揺さぶりだけではなく、内部からも変質を迫られることになるのである。

三 「新たな学び」の場の実現

静岡県立川根高等学校は、県中部地区の山間部の少子高齢化が進む、人口八千人ほどの町にある。全日制の普通科高校で1学年3クラス。教員は22名といった小規模校で、新規採用と2校目といった若い先生方がほとんどである。2002年度から連携型中高一貫教育に取り組み、特色のある教育活動を実践している。教員の中高交流の中心は、TTによる授業交流で授業を大切にしてきた文化も底流している。

❖ 連携型の中高一貫教育での試み

「学びの共同体」に取り組むに当たっては、既存の中高合同会議を授業研究の場にし、テーマを「協同的学び」にしている。実践活動の柱は、春季中高合同研修会（「協同的学び」を入れた高校の提案授業・全体での授業研究会・講師による講演・県指導主事による講評）、秋季中高合同研修会（「協同的学び」を入れた高校の全教科での提案授業・県指導主事等を入れた教科別授業研究会）、そして、日常の授業実践である。

春季の研修会は4月中にある。忙しい時期だが、やはり学校が再生するとき提案授業（第1回の提案授業の様子は、『学校見聞録』佐藤学2012年を参照）を見て、佐藤学先生から理念とビジョンを伺うことで、実践の具体的なイメージがつかめるし、1年間のテーマを思い描けるからである。新任の先生方へのアピールも早い方がよい。そして、授業中心の2学期となる秋に振り返りとしての教科別での授業研究会を持つ。この流れが、教科中心主義的な高校文化、学校内の時間に合っているように感じる。

なお、「協同的学び」をテーマにするに当たっては、次のような視点も示した。「考える力や言語力の育成の具体的な手立てとなるとともに、生徒の学習意欲を高める動機づけにつながる。そこでの生徒の表れや授業で事実を捉えながら『省察』することは、義務教育では経験値が高く、中高での共通視点となり得る。また、教師などの専門職に必要とされる『教師自らの実践を素材に研究することを通して実践を改善していくことを目指す』というアクションリサーチのための反省的思考の契機となる。」

沼津城北高校では、教科、学年、全体といった三層の研修体制をとったが、小規模校で若い先生方も多いので、新採研修等の授業研究会などを活用している。ちなみに、赴任2年目には、中高の研修に係る提案授業11回、新規採用等公的な授業研究会及び公開授業26回、授業研究週間の公開授業616回、その他20数回、計700校時に及ぶ授業研究会の機会があった。参観した感想は、通信にして非常勤、事務職員にも配布する。未来の教育界を担っていく教職員に、次の学校でも実践してもらおうとの長期的視点である。通信には、授業実践例から大学教育の動き、また、実践校や研修会などに行った先生方からの情報や感想なども載せている。

❖ 変容する校内の様子

2012年4月も、佐藤学先生に來校いただいた。前年度に引き続き2回目である。今回は、英語の提案授業を中高の先生方全員で参観し、その後に授業研究会を開催した。やはり、中学校の先生の方が、生徒の学びの実態をつかんだ感想が多く、高校の教員にとってよい経験の場となった。中高一貫教育で授業研究を進める有効性の1つが、このようなところに表れている。事前に複数回、「授業の批評や授業者への助言ではなく、生徒の姿からの感想をしてほしい」と依頼したが、なかなかそれができない先生方もいた。しかし、佐藤学先生は、そのような先生が、「一番私のメモを取っていた」と指摘された。果たして、佐藤学先生が來校した翌日、今まで一斉授業だった先生が、何とグループで授業を進めていた。また、少人数の集団では、コの字型にしてその中に座って授業を進めていた。実に感動的な光景だった。身体感覚として、授業形態が変わるだけでも生徒たちの反応は変質する。それを授業者も体感し、この感覚を快く感じたにちがいない。

ちなみに前年度末には、草川先生に來校いただき、体験授業として先生たちに生徒と一緒に日本史の授業を受けてもらった。その後に、地歴公民科の3人の先生と懇談してもらったが、このなかの非常勤の先生が新年度は、早速グループでの授業に挑戦し始めた。そして連休明けの授業では、生徒たちの雰囲気が一変していた。

グループで熱心に活動をしているので、のぞき込むと資料集を使った基礎固めのワークシートを助け合いながらやっていた。1月足らずで、生徒たちは明らかに変質している。「学び合い」を始めたのである。

なお、少人数の授業集団であることも功を奏してか、先生方は様々な試みをしている。ペアだったり、3人で横並びだったり。ところが半年も経つと、どこの授業も4人グループを中心にした形に収斂ちゆうれんしていく。議論を要しない実践的活動システムである「学びの共同体」の良さである。また、協同的な学びのさらなる可能性を感じた場面があった。毎年、上海の師範大学が訪問してくれるが、英語と数学で「協同的学び」での授業をお願いしたところ、見事に成立したのである。数学の記号と同様に「協同的学び」の普遍性を実感した。

また、2012年度文部科学省の「英語力の強化のための授業改善の取組」事業の指定を受けた。中心となった2人の先生は、本校で新規採用された若い先生方であるが、見事に実践研究を成し遂げた。その2人は、「協同的学び」の推進役であるが、英語科と「協同的学び」との親和性も実証してくれたといえる。そして成果報告会では、40人を超える参加者を迎え、2人ともそれぞれの提案授業を公開した。

いずれにしても外来者によって教室が開かれていく感覚は、いつでも清々しさを伴う。遠隔地にある学校では、人的交流も情報も希薄であるが、「協同的学び」を取り入れた授業研究会を開催することで、県外からも参加者が集ってくれる。これは学校ばかりか地域までも開いていくことになる。

実践から約2年。連携中学校の校長先生方からは、「この高校の授業は他の高校とは違う」と賞賛くださるようになってきている。生徒たちは、「新たな学び」によって日々「生きる力」を蓄え、先生方は、21世紀にふさわしい「新たな学び」の場を実現しようとしている。そして私自身は、長いこと忘れていた静謐せいひつな学校空間とゆったりと流れていく学校時間を取り戻している。

(元静岡県立沼津城北高等学校教頭・静岡県立川根高等学校副校長・浅川典善)